注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ドラゴン・エイリアン

【作者名】
竜鬚虎

【あらすじ】
米映画『エイリアン・プレデター』の二次創作の二作目。

これは魔法の力が世を支える世界での出来事。
ある王国の研究所が、突如正体不明の魔物に襲撃される。報告を受けた王国は、直ちにそこに特殊部隊を派遣する。
到着した彼らがそこで遭遇した生物は、彼らの想像を遥かに超えるものだった。果たして彼らはこの悪魔の巣窟とした研究所から、生き延びることができるのか？
前作『アックス・プレデター』のラスト直後の話です。

にじファンからの手直し移転です。

序章

とある北方の国の、とある高山地帯。寒冷で生物が僅かにしかいない、その寂しい土地に、場違いな大きな建物が点在していた。
巨大な半円形の結界に覆われたその建造物は、何も知らない者が見れば誰もが砦と考えるだろう。

形状は全体的に見ると四角形で、黒い石造りの建物である。四つの角度部には三角帽子のような屋根がついた塔が突き立っており、屋根は平たくとても広い屋上になっている。この建物は結界で覆われているため、降雪に配慮した屋根を作る必要が無かったのだ。
その建物の周囲には、巨大な城壁が四角く囲っており外部からの侵入者を拒んでいる。結界は丁度その城壁を囲う形になっている。

このような様式の建造物であるが、実はこれは城でも砦でもない。この建物の名は「オーリガ魔道研究所」。このウェイランド王国では最高峰の研究機関の本部である。
国内外各地から集められたオーパーツ・特殊魔道具・珍獣などが集められ、それらの徹底解析が、最高の設備と資金援助の元で行われている場所である。

ここでは毎日堅物な研究者達が、それぞれの分野の物品の研究に没頭し、果てしない口論を繰り広げ、護衛のウェイランド兵達がその様子を退屈そうな目で眺めているのが、この研究所の日常風景だった。
だがこの日は少し様子が違った。この日はいつもと大分違う風景。
〝惨劇〟が起こっていた。

研究所内の黒い壁と鉄の仕切りに覆われた長い廊下の中を、二人の男が駆けていた。
一人は研究員と思われる白衣を着た中年の男性で、もう一人は青い甲冑を纏った兵士であった。
兵士の方は、鉄仮面のため表情は判らないが、前を走っている研究員は顔面蒼白、大量の汗を流し、子供のように泣きじゃくりながら死に物狂いで走っていた。その様子は何かおぞましいものに追われているようであった。
やがて二人の走り行く先に、一つの金属製の扉が見えてきた。

「やった！　見つけたぞ！　通信室だ！」
「本当ですか！」

二人は歓喜の笑みを浮かべ、その扉の先の部屋に駆け込んだ。
内部は茶色い鏡台に立てかけられた、大人一人分の身長ほどもある楕円形の大きな鏡がいくつも並べられた、風変わりな内装の部屋であった。

部屋に入った兵士は、即座に扉を閉めて鍵をかけ、手近にあった椅子や机を次々と扉の前に積み重ねていく。
扉は特殊な金属で出来た特別製で、そう簡単に破られるようなものではない。しかし何から逃げているというのか、兵士はそれでも安心できないようだ。

研究員は部屋に置いてあった鏡の一つに手を当てて、何か力を注ぐように手の平に力を込めた。
するとどうだろう。最初は汗だくの研究員の姿を映し出すだけであった鏡面の風景は、突如グニャリと曲がり、いくつもの歪みを生じた後で徐々に形が整っていく。全てが終わった後には、鏡面には研究員とは全く違う人物の姿を映し出していた。
鏡を通して遠くの人間と会話する、この世界の最高の通信技術の品

物「双面千里鏡」である。

「こちらオーリガ研究所！　緊急事態だ！　救援をくれ！」

最初は寝ぼけ目だった鏡面の兵士も、研究員の様子にただならぬものを感じ、瞬時に真顔になって応対する。

「こちらビショップ、どうした何が起こった！」

「魔物だ！　正体不明の魔物が襲ってきた！　所内の奴らはほとんど殺された！　お願いだ、助けてくれ！」

そこまで口にした瞬間、部屋の天井が突然上から弾かれるようにして崩れ落ちた。

落ちてくる大量の石の雨に、研究員は悲鳴を上げて逃げ回る。だが上から落下してきたものは壊れた石材だけではなかった。

舞い上がった砂埃に対して、目に手を当てていた研究員が再度眼前の光景を見ると、そこには先程までこの部屋にはいなかった者が悠然と立っていた。

「あっ、あああ……」

研究員の心の中は絶望で満たされた。

突如部屋に入り込んだものは、人ではなく魔物であった。

大きさはそれなりにある。だいたい人間の大人二人分以上の体重はありそうだ。

体型はおおよそ見ると、人と蜥蜴と掛け合わせた様子であった。ただしリザードマンなどとは明らかに違うものである。体格は細身で、魔物は姿勢を前かがみにして立っている。

全身は青色の異質な表皮で覆われており、手足の四本の細長い指先

には、黒くて鋭い爪が伸びていた。
尾はとてつもなく長く、甲殻のような皮が積み重ねて覆われ、それぞれに小さなヒレがノコギリのように一直線に並んで生えている。そして尾の先端は、槍のように鋭い刃の形状になっていた。
背中には太くて長い突起物が片側二本ずつ、計四本が後ろ側に少し沿った形で生えている。

最後に頭部、ここがこの魔物の最大の特徴であった。
顔には目が無かった。同じように鼻や耳に相違する部分も無かった。魔物の顔面から後頭部にかけては、滑らかな皮で覆われており、まさにのっぺらぼうのような容姿である。そして後頭部はとても長く、背中の辺りにまで伸びていた。
一般的に知られている生物のように、角やたてがみ等で長く見えるのではない。頭そのものがアオムシのように長くなっているのだ。

こんな魔物でも口はちゃんとあった。そこには唇などは無く、白い歯が剥き出しになっている。形状は爬虫類のような鋭い犬歯ではなく、人間の前顎にあるような切歯になっていた。

「ギシャア！」

魔物は一声鳴くと、研究員の所へ一歩詰め寄る。すると相手に悲鳴を上げる時間も与えず、尾で打ち据えた。
長い尾が鞭のようにしなやかに動き、研究員の身体を豪快に打ち飛ばす。研究員の身体は壁に叩きつけられ、あちこちに大量の血を撒き散らし、どっさりと地に落ちた。そしてそれっきりピクリとも動かなくなった。

「うわぁあああああああ！」

残された兵士は絶叫し、ついさっき自分が積み重ねた扉の前の物品

を払いのけ、部屋の外に逃げ出そうとする。
後ろで魔物が、唇を鳴らしながらゆっくりと近づいてくる中、何とか兵士は扉の鍵を外した。そして大慌てで扉を開け放つ。

「へ？」

扉の向こうの光景に、兵士は随分と気の抜けた声を上げた。おそらく鉄仮面の向こうの表情は、大層間抜けな表情をしていることであろう。
扉の向こうには魔物がいた。今まさに背後からよってくる魔物と、全く同じ姿をした生き物が、彼の前方目と鼻の先にいるのだ。
魔物は低い唸り声を上げ、兵士に向けて大口を開ける。
研究所の通信室に、やるせない悲鳴が鳴り響いた。

「な、何なんだ……？　あれは……？」

研究員からの千里鏡による通信を受けていた兵士は、鏡の向こうの一部始終を見て、唖然としていた。
やがて二匹の魔物が部屋から出て行くのを見届けると、突然我に返ったように振り向き、叫んだ。

「緊急事態！　至急ウルフ部隊の出動を要請します！」

第一話　ウルフ隊

王都『ビショップ』、そこはウェイランド王国の中心都市であり、王国軍の総本部がある軍事都市でもある。

その都市の、とある軍事施設の敷地にある軍人寮の一室の扉前に、一人の青年がやってきていた。

年齢は二十歳前後であろうか？　男性として身長はやや低く、百七十センチに僅かに届かないぐらい。黒髪黒眼で肌色は、この国では珍しい黄色であった。

白色の非武装中の兵士の制服を着ていることから、この基地に所属している軍人のようである。

その部屋は〝寮〟と呼ぶにはあまりに広い個室で、あまり物は置かれていない。パッと見て目に映るのは、机と小さめのテーブルとベッド、そして壁に掛けられた剣のみの質素なものである。

そのベッドには一人の女性が眠っていた。太陽は大分昇ってきているのだが、女性は一片も起きる気配は無く、おかしな姿勢で惰眠をむさぼっていた。

その部屋に、訪問した青年の声が、扉の向こうから届いてきた。

「シバ、仕事です！　起きてください！」

あまり力のない棒読みのような口調で、青年は部屋の向こうに対して声をかける。その後で何故か小声で時間の秒数を数え始めた。

「……五、六、七、八……」

十まで数え終わると、青年は懐から鍵を取り出し、迷わず扉の錠に差込み、開錠して部屋に入り込んだ。

「はいはい！　起きた起きた！」
「ふぎゃあ！」

仮にも女性の部屋であるというのに、青年は何の躊躇も無く室内に入り込み、眠っている女性を覆っていた布団を剥ぎ取った。
先程の呼びかけには何の反応も示さなかった女性も、さすがにこれには驚き、刎ねるようにして起き上がる。

「何よ、トサ～？　まだ九時じゃないのよ～」
「〝まだ〟も何も無い！　普通ならとっくに起きている時間だ！」

女性の年代は外見から見るに青年とほぼ同じ、いや僅かに上かもしれない。身長は青年とほぼ同じで、女性として長身の域に入るだろう。彼女もまた青年と同じで、黒髪黒眼で黄色系の肌をしている。
よく見なくても青年とよく似た外見であるが、この二人は血縁などではなかった。この国とは別の土地で生まれ育った、同じ人種の外国人兵士である。

「さっきも言ったけど、どうせ聞いていないだろうから、もう一度言うぞ。今日は訓練じゃなくて仕事だ。さっき上層から緊急の指令が入った。すぐ司令室に全員集合、これで判ったな？」

女性は「は～～い」とわざとらしいぐらい気の無い返事をする。そして床に無造作に置かれていた服を拾い上げ、その場で着替え始めた。
この時ばかりは青年も、女性に背を向けて視線を逸らす。
女性――シバは、すぐ傍で背中を見せている青年――トサに眠気がまだ覚めない目を向けて、口を開く。

「仕事なんてどうせあれでしょ？　またエルダー王国関係でしょう？

あんなもん馬鹿女王の自業自得だっての。巻き添えになった兵士達にはいい迷惑だわ」
「いや、どうも違うみたいです」
「違う？」
「ああ。何でもオーリガの方で何かトラブルがあったそうで」
「オーリガて、何だっけ？」

トサは呆れ顔で、深く息を吐いた。

「魔道研究所の名前だよ。このくらい覚えておいてくださいよ……」
「ああそんなのもあったな。今思い出した。まあどうせあたしらに任せられる仕事なんて何も無いよ。気軽に行こうよ、気軽にな」
「未も蓋もない……」

このあと着替え終わったシバは、朝食を取る為にトサと共に寮近くの食堂に立ち寄り、召集された者の中では一番に遅れて司令室に到着した。

ウェイランド王国特務部隊『ウルフ隊』の司令室。広さだけは無駄にあり、正面にはウェイランド王国の大きな地図が派手に貼り付けられている豪勢な部屋である。
部屋の中にはシバ・トサを含めた総勢二十人の隊員たちが整列していた。そして彼らの目線の先、正面の地図の真ん前に、今回の任務の概要を伝えるウェイランドの将校が立っている。

「今から七十分前にオーリガから緊急の救援要請が来た。〝正体不明の魔物が襲ってきた〟、ということ意外に詳しい概要は不明。通信の途中に、その魔物と思われる謎の生物が出現し、通信して来た所員を

襲い通信が途絶えた。事態は急を要すると判断し、直ちに事態の究明・生物の駆除・生存者の救出のためにウルフ部隊の派遣が急遽決定した」

将校はその生物の特徴及び、任務の詳しい進行法を淡々と説明していった。

説明が終了し、ウルフ隊は意気揚々と飛行場へと足を進めていく。

この隊は新米のシバ・トサを除けば、数々の戦績を残してきた屈強の戦士達である。強大・凶暴な魔物で知られるバジリスクを、正面からぶつかって見事生け捕りにしてみせ、あげく軍事利用できるように調教して見せたこともあった。

そのため相手は未知の生物であっても皆余裕の表情であった。一方のシバは、余裕というよりただやる気の無い顔で足を進めていた。ただ一人トサだけが、怪訝な顔を浮かべていた。

「シバ……。話しの魔物って何だと思う？」

「ああ？　どっかで捕まえてきた実験動物とやらが逃げ出しただけだろ？　今まであいつらがしてきたことを考えれば、襲われて当然よ。いい気味だぜ」

「でも……、だとすると所内の研究員が〝正体不明〟というのはおかしくないか？」

「さあな。変身でもするタイプだったんじゃないの？」

納得がいかない様子のトサに、シバは冗談めかして再度言葉を返した。

「案外、異界の奴だったりして」

「さすがにそれはないでしょう。あんな御伽噺」

二人はここで話しを止め、飛行場へと向かっていった。

隊員達は基地内にある広間に到着した。運動場のように広く、整備がなされたその場所に、とてつもなく巨大な生物が七頭、ウルフ隊を待ち構えていた。
それは竜だった。全身が白い鱗で覆われており、前足は巨大な翼になっていて蝙蝠の様な形で翼をたたみ、拳を地面につけて立っている。そして口元から手綱、背中から首元にかけては騎乗用の鞍が取り付けられていた。

この生物の名は氷絶飛竜《アイスワイバーン》。ウェイランド領内に最も多く生息する竜族で、この国の航空産業に最も多く利用されている生物である。
最も頭数自体がそれほど多くないため、ウェイランド王国の航空力は、ジャイアントダックを大量に飼いならしている南のエルダーと比べると、とてつもなく低かった。

隊員達の姿を確認したアイスワイバーン達は、自ら彼らに寄り、首を地面につけ、腰を曲げ、前方から背中の鞍を隊員に見せ付ける。
隊員はアイスワイバーンの頭と首を、階段を上がるように歩き、難なく背中に乗り込んだ。

尚この時隊員達は皆、全身を板金で包んだ銀色の甲冑を着ていた。
顔全体を覆う鉄兜は、形が鳥の顔のように前方に伸びており、後頭部を覆う部分からは二本の角が短く生えていた。眼を覗かせるための穴の部分は鋭いひし形になっており、睨みを利かせた肉食獣の目のようにも見える。この国の力の象徴にもなっているアイスワイバーンの顔を象ったものだ。
そして胴の胸部分には、翼を広げたアイスワイバーンの姿が描かれ

た王国紋章が付いていた。

この甲冑はただ外見にこだわっただけの物ではない。魔法による特殊な加工法によって鋳造されており、耐久性が非常に高い。そして何よりも板金の厚さに比べて、甲冑全体がとてつもなく軽いのだ。数ある防具類の中でも最高級の品物である。

隊員達は次々とアイスワイバーンに乗り込んだ。一頭につき三人ずつ、トサとシバは人数上の関係により二人で乗り込んだ。甲冑のため顔による判別が付かないが、前側に乗り込んでいるのがシバである。

本来ならば一人一騎ずつ乗り込むものなのだが、つい最近、ある事情が元でアイスワイバーンの数が急に不足したため、この仕様になった。

全員が乗り込んだのを確認すると、ウルフ隊の隊長シェパードは、掌を天に掲げ号令をかけた。

「ウルフ隊、出撃！」

その瞬間隊員たちはアイスワイバーンの首元を軽めに蹴る。すると彼らを乗せたアイスワイバーン達は、急に翼を広げ、首を上げて羽ばたきを始めた。

翼からは風と共に魔力を纏った浮力が発生し、アイスワイバーンの重量を軽減させる。やがてその太い足を使って、一気に地面を蹴ると、七頭のアイスワイバーン達は一斉に空へと舞い上がり、目的地のオーリガ研究所へと飛び立っていった。

出発しておおよそ二時間。ウルフ隊を乗せた七頭のアイスワイバーンは、オーリガ研究所が肉眼で確認できる距離にまで到着した。

研究所は黄色半透明の巨大な結界で覆われているため、その姿は遠方からでもよく見える。
その研究所、ようするにその巨大な結界に近づいてくると、拡声の魔法で増幅されたシェパード隊長の声が辺りに響いた。
「あの場所に着陸するぞ！　間違ってもあの結界の壁に近づこうとするな！　触れた瞬間、丸焦げになって死ぬぞ！」
シェパードは研究所から少し離れたところにある、岩場が少ない開けた場所に剣を向けて指示を出した。その場所は、草木等の存在は見えず、雪で真っ白に染まっている。
指示後、シェパードの乗るアイスワイバーンはそこに向かって下降していった。残りの者達も、後に続いてそこに向かっていく。
七頭は指示されたその場所に無事着陸した。アイスワイバーンはその巨体に似合わず、羽毛でも落ちたかのようにスタリと着陸してみせる。
隊員達はゾロゾロと降りて、雪の積もった地面を踏みつけながら、さっさと研究所に向かって歩いていった。残されたアイスワイバーン達は彼らを見送りながら、その場で待機の姿勢をとる。
やがて隊員達の前に、分厚い魔力の壁が立ちはだかった。
彼らはそこで立ち止まったが、ただ一人シェパードだけが、結界のギリギリの距離まで歩み寄る。
彼は懐から何かを取り出した。それは青い水晶玉だった。シェパードは無言でそれを結界に投げつけた。
バシュッ！
鶏の卵ぐらいの大きさの水晶玉が、その結界に衝突した瞬間、写真機の起動音ような音が鳴り、水晶玉は雪のような光の粒子となって砕

け散った。
同時にその衝突した部分を中心に、結界の一部分が青く発光し始めた。その光はとても強く、傍観していた隊員たちは即座に眼を瞑る。
光はすぐに治まり、再び目線を向けると、何とそこに大きな穴が出来ていた。一線四メートルほどの大きさの正方形の穴が、結界のその部位にポッカリと開いているのだ。
「おおおっ！　よく判らんが何か凄いな！」
何故かシバが、この一連の現象に感嘆の声を上げる。トサの方は少し動揺したものの、傍らで急に大声を上げたシバの声のほうへの驚きの方が大きかった。
他の隊員達はこれといった反応はなく、穴に向けて再び歩き始める。
最後尾にいたシバ・トサがこの穴を通り抜けたとき、先頭にいたシェパードが二人に命令を下した。
「シバ！　トサ！　お前達はここに残れ。万が一標的がここから逃げ出さないように、この通路を警護するんだ！」
「へ～～～～い」
最初から予想していたのか、シバはこの命令に相変わらず気の抜けた声で頷いた。
残る十八人の隊員は、結界の向こうのすぐ近くにある城壁の門に立った。門は既に開け放たれており、どういうわけか扉の一部が破壊されている。
シェパードは後ろにいる隊員達に顔を向けると、皆無言で頷く。そして全員、その空けられた城門を潜り抜けていった。
その場で残された二人は、一度顔を見合わせると、結界の穴の部分

に対面している城壁の部分に向けて歩き出した。
二人は壁に寄りかかり、並んで座り込む。顔の先には例の四角い穴が、真正面からよく見える。

「冷えるな……」
「うん……」

シバは腰にある剣を引き抜いた。
ウェイランドの主流武器は、両刃式の細身の剣のエストックである。だがシバとトサが帯剣している得物は、それとは全く異なるものであった。
それは片刃式の細身の剣で、刀身がやや峰の側に反り返っている。鍔は楕円に近い形で、柄と刀身の間を挟んでいた。柄の握りの部分には帯状の紐が巻きつけられている。鞘は黒く塗られていて、中心に花柄のような紋章が貼り付けられていた。この国では何とも珍しい形の刀剣である。

「……灯火」

シバが一言そう呟くと、剣先が赤く発光し、やがてそこに小さな火の玉が発生した。
とてつもなく寒い高山のその場所が、少しだけ暖かくなった。

二人はこの国の人間ではない。南方のエルダー王国の出身である。
エルダーとは国境を山脈で塞がれており、両国の行き来はとてつもなく少ない。だが全くない訳ではない。
この二人は、かつて若き冒険心に駆られ、その山脈を登って国境を突破したのだ。国境には警備はおらず、国境越えを罰する法は存在しない。そもそもあの険しい山脈を超えられるような強者は、そう多くはいないのだが。

なおつい最近このウェイランド王国は、そのエルダー王国に侵略戦争を起こし、そして敗戦している。
そのためかエルダー出身の二人の、最近の扱いは少々きつくなっている。

「あいつら生きて帰ってくるかな？」
「何でです？」

不意に口にしたシバの言葉に、トサが首を傾ける。

「なんていうか、予感ってやつ？　逃げる準備をしたほうがいいかも」

シバは目の前の砦のような建築物を見上げながら、ぼんやりと呟いた。

第二話　魔物

研究所内部に入った隊員たちが、最初に感じ取ったのは熱気だった。

入口前、上がり階段がある二階分の高さのある広間の中、そこには人の気配は全く無かった。そしてその空間は、外の雪景色の場所とは違い、暖房が利いていてかなり暖かくなっている。

いや暖かいというより、むしろ暑すぎるぐらいである。全身に甲冑を纏った隊員達には、なかなか堪えるものであった。

広間の奥には左右に二つの通路が存在していた。

シェパードが部下達に二言指示を出すと、隊は二手に分かれてそれぞれの通路に入っていく。

右側の通路に入ったハスキー副隊長率いる八人の隊員達は、廊下の横にある部屋を一つずつ丹念に覗きながら前進していった。

部屋の中には大量の資料や、訳の判らない機材が大量に置いているばかりで、特に際立って目を引く物は無かった。

やがて彼らは正面の曲がり角に〝病室〟の表札が掛けられた扉に辿り着く。

不思議なことにこの扉は、下の廊下に接する一部分が壊されていた。隊員は首をかしげながらも、今までどおりに内部を確認しようと安易に扉を開く。

「なっ、なあ〜〜!?」

真っ先に中を覗き込んだ隊員が、一瞬固まったかと思うと、唐突に

素っ頓狂な声を上げた。

「どうした!?」

「ハッ、ハスキー！　これを！」

隊員が促すと、他の隊員達も次々と部屋に入っていく。

彼らは内部の惨状に唖然とした。

その病室には左右横に大量の患者用のベッドが並べられており、そこに患者が十人ほど寝かされていた。そしてその患者達は、全員同じ傷口を持って死亡していたのだ。

彼らの腹にはポッカリと穴が開いている。銃傷と見るにはあまりに大きい。しかも肋骨が外側に向けてへし折れて、その白い姿を覗かせている。

回りには飛び散ったと思われる血や肉片が散乱していた。まるで内側から何かが飛び出したかのようだ。

隊員達は動揺しながらも遺体の状況を、一つ一つ丁寧に調べ上げていく。

「安静中に例の魔物に襲われたのでしょうか？」

「まあ……、そう考えるのが妥当だろうな。それにしては妙な傷口だが……」

不意にハスキーは妙な気配を感じた。気配というより視線であった。隊の者ではない何者かが自分達を監視している！

「何者だ！」

ハスキーは瞬時に剣を抜き、たった今自分達が通ってきた扉に向けて声を上げる。

扉の横で、顔を一部だけを出して覗いていた人物（？）はこれに驚き、廊下の方へと走り出した。

「待て、貴様！　なあ!?」

部屋を出たハスキーは、その逃亡者の姿を見て絶句した。
それは報告にあった魔物ではなかった。とはいっても人間とも到底思えぬものでもあった。
遠くからの、しかも背後から見えているだけなので、背格好は明確ではなかったが、体型や動きは人間と全く同じである。ただ一つ違うのは、その者の姿が薄く〝透けている〟ことであった。

「俺に任せろ！」

一人の隊員がいきなりハスキーの前へと踏み込んだ。すると彼を中心にして竜巻のような風が発生した。風に煽られた彼の身体が、風船のように数十センチ程浮き上がる。

「風速！」

声を上げると、彼はとてつもない速さで、逃亡者に向かってホバー走行をしていった。
隊員と謎の逃亡者の鬼ごっこが始まった。
隊員は逃亡者との距離をぐんぐん詰めていく、逃亡者の足の速さはかなりのものであったが、隊員の魔法による移動速度の方が遥かに勝っていた。

逃亡者は先程ウルフ隊が入ってきた入口前の広間に辿り着いた所で捕まった。背後から頭を掴まれて、そのまま近くの壁に叩きつけられる。その衝撃で、逃亡者はそのまま倒れこんだ。

「何なんだ、お前は？」

魔法を解き、逃亡者の前に立った隊員は、逃亡者の姿をまじまじと見詰めた。

逃亡者は十歳ぐらいの少年だった。身長は百四十程、黒髪黒眼で黄色の肌をしている。自分のよく知る新米の異国人の同僚とよく似た容貌であった。

衣服は珍しい作りで、袖通しのある長い青色の布を身体にスッポリと被り、腰の辺りに長布を巻きつけて身体に固定させる形式であった（この形式の服を俗に〝浴衣〟という）。靴は藁を編んで作られたと思われる、サンダルのようなタイプのものである

これだけならば、ウェイランドとはどこか違った文化を持っているのであろう外国の子供ということで納得がいく。

納得できないのは、やはり彼の身体が透けていることであろう。全身が衣類も含めて、やや半透明になっており、彼の身体から向こうの風景が薄っすらと見える。

ここは各地からおかしな物がいくつも取り寄せられてくる魔道研究所。

頭が冷えてきた隊員は彼の正体に何となく予想がついてきたが、念のためにもう一度質問する。

「お前は何だ？　乱暴はしないから正直に答えろ」

「……!?」

何故か少年は隊員のほうを見ていなかった。彼は眼を大きく見開いて、隊員の後ろにある上がり階段を凝視していた。

「何だ……、が!?」

突如の出来事であった。「ドシュッ！」という嫌な音と共に、隊員は自分の腹に巨大な刃先が生えたのを目撃した。いや、巨大な刃が彼の身体を背後から貫いたのだ。

「があっ？」

貫かれた痛みをようやく感じ取ったかと思うと、今度は隊員の体が宙に浮き上がる。何が起こったのか判らず、隊員は先程少年が見詰めていた方向に首を向けた。

そこにいたのは間違いなく報告にあった例の魔物であった。

魔物は階段の手すりに乗りかかっており、ちょうど対峙していた隊員と少年を見下げる位置にいた。

そして魔物のとてつもなく長い尾は下に伸びて、隊員の背中に繋がっている。魔物はこの距離から隊員の身体を背後から貫いたのだ。

魔物は尾を引き上げた。身長百九十センチで、甲冑を身に纏った大柄な男の身体が、釣り上げられた魚のように、軽々と持ち上げられる。

魔物と隊員は正面から顔を突き合わせる形で、僅か距離数センチの所まで近づく。隊員の視覚に眼のない魔物の異形の顔が、最大限に拡大されて映し出された。

（なめんなよ！　このくそ醜い化け物め！）

隊員は瀕死に近い状態にありながらも、最後の抵抗を試みようと、腰に差された剣に手をかける。

「ピギィ！」

その瞬間、魔物は唸り声を上げて、口を大きく開いた。隊員が最後に見たものは、魔物の口の中から〝もう一つの口〟が飛び出して、自

らに接近する瞬間だった。

グチャ！

広間の中、先程とは違った音響の気持ちの悪い音が、再び鳴る。少年の眼前に、白と赤の入り混じった液体が飛び散り、少年は思わず目を背けた。

魔物の口内から、先端に四つの牙がついた口のような顎がついた奇怪な舌（？）が現れた。そしてそれは隊員の眉間目掛けて、勢いよく伸びる。

隊員の顔を覆っていた鉄兜は紙のようにたやすくぶち抜かれ、頭蓋を通りぬけ、後頭部にまで飛び出した。舌（？）はすぐに引き戻され、隊員の頭からは血と脳汁が両面から噴き出す。

「バーナード！」

「貴様！　やりやがったな！」

後から追ってきた隊員たちが、まさにこの瞬間に到着していた。そして眼前の光景に怒りの声を上げる。

魔物は一鳴きすると、尾を一振りした。その勢いで貫かれていた隊員の身体が尾先から引き抜かれ、地面に投げ出される。隊員の体は勢いに流れて少し地面を滑り、壁に激突して静止した。

「くたばれ！」

激昂した隊員達は一斉に魔道剣を引き抜き、切っ先を目上の魔物に向けた。

剣身は魔力によって白く発光しており、剣が魔物に狙いを向けたと同時に、強力な冷気の矢が生まれ、直線状に魔物目掛けて飛ぶ。

七本の魔法攻撃が直撃する前に、魔物は前方に向けて飛び跳ねた。

その跳躍力は凄まじく、一蹴りで広間の向こう側の壁の近くに着地する。
的を外した魔法は階段の手すり、もしくは階段の上の天井に激突して大量の冷気を噴霧させた。

「おのれえ！」

隊員達はすかさず剣を構えなおし、飛び降りた魔物に再び魔法を撃つ。だがこれもかわされた。
魔物は跳躍力だけでなく、走行速度・敏捷性もとてつもなく高かった。広間の中を駆け巡りながら、次々と撃ち出される氷の魔法を難なくかわしていく。
魔法は壁に激突して砕け散り、やがて広間全体が白い気体に覆われた。

「馬鹿が！　考えなしに撃ちやがって！」
「申し訳ありません！」

広間といえ、ここは閉鎖された空間である。隊員達が放った魔法の冷気が、そこかしこに散乱し、視界を大きく曇らせる。

「視覚に頼るな！　気配を追え！」

ハスキーの指示を受けた隊員達は、精神を集中して魔物の存在を感じ取ろうとする。
厳しい訓練を受け、魔力で感覚を強化する能力得た彼らは、目ではなく気配で相手の動きを読み取る能力に長けていた。

それにあの手の魔道生物は、体内から無駄に強い魔力を発散させている。魔法にも長けた彼らならば、少し意識を傾ければ居所などすぐに判る。

ビシッ！

だが何故かそれは叶わなかった。突然聞こえた地味な音と共に、一人の隊員が空中に投げ出された。

「馬鹿な!?」

ハスキーは慌てて音のした方向に目を向ける。

そこには冷気の中、鞭のように動く長い物体の影が、隊員の影とおぼしき物を打ち据える姿が目に入った。これだけ近くまで来ていたのに、誰も魔物の動きを感知できなかったのだ。

バシィッ！

また一人の隊員が宙を舞った。そしてその鞭を動かすものの影が、ハスキー目掛けて足音一つ立てずに突進してきた。

ハスキーは即座に迎撃の構えをとる。だが魔物の影がハスキーへと到達する前に、突如動きが止まった。

「……!?」

魔物の影は呻き声を上げながら、その場で立ち往生している。次第に冷気は晴れてゆき、眼前の光景が鮮明に映し出された。

「ピギャギャァァァァァァ！」

「くそ！　動くな、化け物！」

魔物は両手と胴を、二本の鎖で縛り上げられていた。左右から二人の隊員が魔物に向けて、魔法の捕縛鎖＝マジックチェーンを伸ばし、魔物を見事捕獲しているのが判った。

「ハスキー！　早くとどめを！」

魔物は蛇のように身体をくねらせながら、拘束から逃れようとする。その力は凄まじく、取り押さえている二人の屈強の戦士達は、渾身の力を込めて押さえているにも関わらず、今にも引っ張り倒されそうだ。

ハスキーは剣の魔力を最大限に高めた。剣に纏っている白い光が急激に高まる。

「はあっ！」

全身全霊を込めて、必殺の刺突を魔物に与えた。細身の長剣は魔物の胸を突き刺し、剣先が背中から飛び出して、見事に魔物の身体を串刺しにしてみせる。

剣と一体化した魔物の傷口からは、黄緑色の異彩な体液が流れ落ちてきた。剣が引き抜かれると、それが更に大量に流れ落ちる。

勝利を確信したハスキーは、その時奇怪な現象を目の当たりにした。

「何だ!?」

魔物の身体から流れ落ちた、絵の具のような色合いの体液が、傷口より下にあった魔物を縛り付けているマジックチェーンに触れた。

その瞬間、「ジュワ！」という音と共に、冷気とは異なる白い煙が発生したのだ。

よく見ると体液に触れた部位が、見る見る黒く変色している。

いや違う。腐食している！

バキィイイイイイン！

それに気付いたときにはもう遅かった。強度が低下したマジックチェーンは、魔物の怪力によって見事に引き千切られた。
縛り上げていた隊員達は、一挙にバランスを崩し倒れこむ。そして魔物は一気に目の前にいるハスキーに飛び掛り、押し倒した。

（しまった！）

眼前に迫った魔物の口から、例の奇怪な舌が出現し、ハスキーに顔面目掛けて伸びてくる。
ハスキーは魔物の両腕に掴みかけられる激痛を感じながらも、首を曲げて何とかその攻撃を回避した。自分の頭のすぐ脇の床石に、ポッカリと小さな穴が開いた。

「この野郎が！」

四人の隊員が、ハスキーを取り押さえている魔物に飛び掛った。
彼らは魔物の背中から生えている突起物を掴み、ハスキーから引き離そうと魔物の身体を引っ張り上げる。

四対一の力比べが続く中、魔物の傷口からは、あの酸のような危険な体液が流れ落ちてくる。
体液は、下にいるハスキーの身体にどんどん付着していった。そして表面を覆う甲冑の板金が見る見る溶けていく。

「「うおりゃああ！」」

ついに魔物は引き剥がされ、隊員達によって数メートル先まで投げ飛ばされた。

「早く鎧を！」

言われるまでもなくハスキーは、魔物の体液が着いてしまった甲冑の胸当てを、大急ぎで剥ぎ取り、投げ捨てた。
近くの石床に落ちた胸当てが「ジュワアアアア～」とステーキを焼いているかのような音を立てて溶解していく。
あまりに奇怪な体液だ。もし氷の魔力を纏っていなければ、突き刺した剣も、見る影もなく溶けてしまっただろう。
隊員達は目の前にいる。負傷して弱りきった魔物目掛けて、一斉に魔法を撃った。

「ギャァァァァァァァッ！」

四本の凍てつく烈風に、魔物は甲高い断末魔を上げながら、実にあっけなく凍りつく。
串刺しになっても絶命しなかった魔物も、ここまでやられれば再び動き出すことは二度とあるまい。

「あの二人の救護を！」

魔物の撃退を確認したハスキーは、先程魔物の尾に打ち付けられた二人の隊員の救護を命じた。彼らは倒れ付した二人に即座に駆け寄る。
その瞬間、彼らはこの広間に、いつの間にかいくつもの殺気が現れていることに気がついた。

（まさか……！）

慌てて回りを見渡す。すると前方の広間の左右の角、通路に繋がる辺り、左側に一匹、右側に二匹。手前にある階段の手すり、先程魔物がいた場所と全く同じ場所に一匹。そして後方にある研究所の入口前に一匹。計四匹が隊員達を包囲していた。

これだけの魔物が接近していたにも関わらず、隊員の誰一人として敵の気配に気がつけなかったのだ。
気配を隠すのが上手いというだけではない。何故ならこの魔物たちには、魔道生物なら本来持っているはずの魔力の波動を、一切放っていなかった。
そのため彼らは、魔力で魔物たちの位置を感知することなど出来なかった。

(どういうことだ⁉　あいつらは魔道生物ではなかったのか⁉　だったらこいつらはいったい⁉)

魔物達は隊員達が構えなおす隙を与えず、一斉に飛び掛った。
ある者は尾で打ち飛ばされた。ある者は魔物の第二の口(舌)に、頭や胸を貫かれた。

「おのれぇぇぇぇぇ!!」

ハスキーは目の前で隊員の叩き飛ばした魔物に、剣を向けて突撃した。だがその剣が魔物に到着する前に、魔物の大振りに振られた尾先が、ハスキーの首筋を通過した。

「……!」

尾の刃に喉をかき切られたハスキーは、ダラダラと血を垂れ流し、剣を握り締めたまま崩れ落ち、絶命した。

「どこもかしこも酷い有様だな……」

左側の通路に入ったシェパード率いる部隊は、次々と目に入る光景に嘆息した。
ハスキー達が入った通路とは違い、シェパードの向かった先には、いくつもの人間の死体が転がっていた。鈍器にでも殴られたかのように胴体がへし折れた者や、頭に小さな穴が開いているものなど、実に悲惨なものである。
彼らは今や期待できない生存者と、敵である魔物を見つけ出すため、通路を真っ直ぐ前進していた。

途中で幾つもの曲がり角や分かれ道があったが、これ以上の分散はやめたほうがいいと考えて、彼らは前方・後方を厳しく警戒しながら、ひと塊になって進んでいく。
静かな廊下の中に、カツカツと複数人の小さな足音が耳に届く。
一応彼らには目的地があった。シェパードが暗記したこの研究所の見取り図によれば、この先にはこの施設で一番大きい部屋である、中央研究室があるはずである。

やがて彼らはその目的地に到着した。そこに至る道に入る通路は一際広くなっており、奥には今まで見てきた扉とは比べ物にならない大きさの、金属のドアが存在した。
砲弾を受けてもびくともしない、分厚い頑強な扉。だがその扉は現在、堂々と開け放たれている。

「さあ～て。何があるかな」

シェパード達は好機半分・恐怖半分といった様子で、中に入っていった。

第三話　不死身の魔物

中央研究室の中は、実にガランとしたものだった。
内部はとても広く、基地の体育館二つ分もの広さがある。何らかの研究機材と思われる物品がいくつも置かれていたが、たったこれだけのためにこの広さは意味があるのか？という疑問が真っ先に浮かんでくる。

広くて高い一面の壁には、壁に沿って建てられた上がり階段が設けられている。
その階段の先、地上より七、八メートル程上の壁には、先程シェパード達が通ってきた物と全く同じ大きさの扉が張り付いていた。おそらく上階からこの部屋に出入りするための物だろう。

壁・天井・地面は全て重厚で煌びやかな金属板で覆われており、点けっ放しの電灯の光がそれらに反射して、部屋全体が鏡の部屋のように美しく照らされていた。
シェパードはその部屋の一角に、目当てのものを見つけた。

「あれか……、例の〝棺〟というやつは」

それは大きな金属製の箱だった。形は平らな長方形で、蓋は開閉式になっている。そしてその蓋は錠前と思われる部分が破壊されており、現在完全に開かれていた。

これは数週間前にこの研究所に運び込まれた大型のオーパーツであった。発掘地はウェイランド王国とエルダー王国との国境付近の遺跡の中で、非常に重大な魔道遺物の可能性があるとして、この研究所に送られたのだ。

その発掘地は、かつて魔物狩りを行う狩猟場であったという情報もあった。そのためシェパードは、突如研究所内に出現した謎の魔物は、この棺と何らかの関係があると睨んでいた。

隊員達がその棺を取り囲む。

「もぬけの殻ですね」

「ああ……」

棺の内部は十の仕切りに分けられており、それぞれに何らかの小物を入れる仕組みになっていたようだ。だが中の物はすでに採取された後の様で、今は何も入っていなかった。

「何が入っていたんでしょうね？　もしかして例の魔物の卵だとか？」

「ありえる話なだけに笑えないな……。この部屋にこうして無造作に置かれているということは、充分な研究が終わらないうちに事が起こったということだ……」

シェパードの言葉に隊員達は皆息を呑む。

「あれ？　あそこに同じようなのが、もう一個ありますよ？」

辺りを見回してみた一人の隊員が、無駄に広い研究室の中、もう一つの棺が置かれているのを発見した。他の隊員達もそちらに振り向き歩み寄る。

その棺はまだ開けられておらず、錠前と思われる部分も未だ健在だった。一人の隊員が剣を抜き、その錠前に切っ先を向ける。そしてシェパードに下問した。

「壊して開けてみましょうか？」

「ああ、いいだろう。だが気をつけろ。少しでも危険を感じたら、一斉

に魔法で破壊する」

許可の言葉が出ると、隊員は剣の魔力を高め、切っ先を一旦引き、錠前目掛けて一気に刺突した。

ガキイイン！

鋭い金属音が、研究室の巨大な空間の中に木霊する。

錠前は……壊れなかった。表面が多少削れたものの、破壊には至らない。

「無理っぽいですね……。やはり専門の工具が必要のようです」

そう嘆いたほんの一瞬後の出来事だった。突如彼らの後方から、肉が裂けるような音と、小さな悲鳴が聞こえた。

「何だ!?」

一斉に振り向くと、そこには問題の魔物がいた。しかも最後尾にいた隊員の一人が、背中から魔物の鞭のような尾の先端に貫かれ、空中に干し物のように釣り上げられている。

「レトリバー!?」

あまりに突然の事態に隊員達は混迷した。

魔物は一匹ではなかった。あちこちにあった機材の影から次々と姿を現す。その数は全部で五匹。これにシェパードは更に動転した。

（馬鹿な!?　この私が気配を読み取れなかっただと!?）

吊るし上げにされていた隊員は、魔物の尾の一振りで放り投げら

れ、五匹は一斉に隊員達に飛び掛った。
すぐ我を取り戻したシェパードと二人の隊員が、即座に先鋒に走りよった。そして水色に光る剣を魔物たちに向ける。

「水結界！」

三人の剣先に小さな水の膜が発生したかと思うと、それは一挙に広がり、巨大な水の壁に変形して、ウルフ隊の正面に覆いかぶさる。
魔物達はその壁に激突してこけた。

「はあ！」

三人が剣を一振りすると、水の壁が一気に前方に押し寄せられる。魔物達はその壁に押し飛ばされ、大量の激水と共に前に投げ出された。
次に残っていた六人の隊員が、転がり落ちた魔物たちに向けて次々と氷の魔法を放った。
水に濡れた魔物達の身体に、凄まじい冷気が襲い掛かる。水はあっというまに固体化し、魔物は全身を白い結晶に包まれて動かなくなった。

「なあ、なんか変な気配を感じねえか？」

鞘で地面の雪に落書きを描いて遊んでいたシバが、不意にすぐ横で傍観しているトサに顔を向けずに声をかけた。

「ああ確かに何かいるね……」

二人は城壁の向こう側、研究所の入口付近にその存在を感じ取っていた。
その気配はかなり強く、おかしな魔力も同時に感じ取れる。そのため二人は壁越しからでも、その存在に気付くことができた。
シバは興味津々といった表情で立ち上がり、上げ蓋のような構造で開かれていた兜の顔当てを閉めた。シバの顔が再び鉄仮面に隠れて見えなくなる。
「あたしちょっと見てくるわ。トサはここで少し待ってて」
「馬鹿言わないでください。さっきやばそうだと言ったのはシバじゃないですか」
そんなやり取りをしながら、二人は開かれた城門の前に立った。
「「あ!?」」
そして向こうにある研究所の入口前を見て、二人同時に目を丸くした。
「幽霊？」
「ていうかあいつは……」
トサが思ったことをそのまま口にし、シバがその姿に心当たりがあるかのような発言をした。
そこには人がいた。先程ウルフ隊に追われていた半透明の謎の少年である。確かにその姿はどうみても幽霊である。
驚いたのは少年の方も同じだったようで、シバとトサを見ながら口をあんぐり開けている。
そして自分を見詰めている二人に向けて、慌てた顔であたふたと手

を振っている。口をパクパク開けて何かを喋っているようだが、何故か彼の口からは声という音が一切出てこない。
やがて少年は二人をグッと見詰め返すと、踵を返して研究所の中へと駆けて行った。

「ああ!?　ちょっと待て！」

少年の逃走に驚いた二人は慌てて後を追い、研究所に入っていった。

「本当に何なんだろうな。こいつは……」

中央研究室にいるウルフ隊は、眼前にいる今や氷像と化した魔物達を、上から下へとしげしげと見詰め、そう漏らした。

魔物の身体に張った厚い氷は、研究所全体に作動している暖房の熱気に当てられて、僅かだが溶けてきていた。溶けた水が汗のようにタラタラと流れ、雫が小雨のように地面に垂れ落ちている。

魔物に身体を貫かれた隊員は、緊急で魔法治療を行ったものの、努力の甲斐なく息を引き取った。
観察と状況整理が終わると、シェパードは冷静に次の指示を出した。

「この棺を外に運び出すぞ。外に待機している二人に一旦こいつを預けて、我々は残りの魔物がいないか再調査する」

四人の隊員が棺を持ち上げる。シェパードが先導して研究室の外

に出ると、またもや驚くべき光景が飛び込んできた。

「また来たか！」

廊下の奥からあの魔物が三匹、こちらに向けて全力疾走して来ている。

「全員構えろ！」

今度は皆、平静を乱すことなく前方から近づいてくる魔物を睨みつけ、魔法の構えを取った。

「水波！」

魔物が一定の距離に近づいてきた時、シェパードを含めた三人が魔法を放った。

剣先から大量の水が発生し、激流のように魔物目掛けて放水された。魔物はその水に吹き飛ばされ、廊下の奥に転がり落ちる。

「ようし、撃てえ！」

後方の六人が先程と同じように、氷の魔法を放つために前に踏み込もうとした。

だがそうする一瞬前に、「ビシィ！」と響きの良い音が重複して聞こえ、六人の身体が空中に投げ飛ばされ、左右の壁にそれぞれ叩きつけられる。

「何だ!?」

シェパードが振り向くと、そこには魔物がいた。数は全部で五匹。全身を覆っていた氷が、パラパラと欠片となって崩れ落ちている。

（馬鹿な!?　こんなことありえない！）

そう、確かにそれはありえないことであった。目の前にいる魔物は、先程自分達が氷漬けにした個体に違いなかった。しかし何故復活している!?

多少ばかり氷が溶けたからといって、あれほどの冷却を受けて、生きていられる生物など常識的に考えて存在するはずが無い。

その迂闊さは、ある意味仕方が無い事ともいえる。

この生物が、空気の無い宇宙空間に投げ出されようと、南極の地下に百年冷凍されていようと生存できる生命力を持っているなどと、誰が予測できるだろうか？

魔物達は三人に向かって一匹ずつ飛び掛った。

二人はこの奇襲に押し倒され、魔物に噛み付かれる。シェパードは水の壁を張って何とか防御に間に合ったものの、魔物の体当たりの威力に力負けし、数歩後方に下がった。

（おのれえ！）

一時姿勢を崩したシェパードだったが、反撃のため即座に立ち上がる。

グチャ！

だがその時、後頭部から卵を潰すような音と共に、奇妙な感触を感じた。

（……何だ？）

シェパードは恐る恐る後頭部に右手をやる。そこには一部分、兜の硬質な手触りが無くなっていることに気がついた。そして手を引くと目に映った物は、指に付着した自身の脳味噌の欠片であった。
ゆっくり首だけを曲げて振り向くと、そこには全身水浸しの魔物が、口内から血のついた〝第二の口〟を覗かせながら、シェパードの頭からほんの僅かな距離にまで、その奇怪な顔を近づけていた。
研究所内部に数人の人間の悲鳴が、悲しげに木霊した。

少年を追って研究所に入ったトサとシバは、入口からの最初の一歩で硬直してしまった。

「嘘でしょう……これ？」

研究所に入ってすぐの広間にいたのは、腹や胸を貫かれた無残な同僚達の姿であった。予想外すぎる光景にトサがそう口漏らす。

（これはあいつが……そんなわけないか）

シバが近くで仰向けに倒れている魔物の姿を認めた。全身を張っていた氷はもう大分溶けている。
二人は用心しながら、この魔物に近づいた。僅かだが魔物の右手が揺れたのを見たため、腰の剣に手をかけ、いつでも迎え撃ちができるようにする。

「グギャアッ！」

すぐ側、二人が倒れた魔物を見下ろす距離に到達したとき、唐突に

魔物がバネのように跳ね起きて、二人に牙を向ける。

「「だぁりゃあ！」」

魔物が完全に起き上がる前に、二人は同時に攻撃した。

ただし剣は使っていない。二人はほぼ同じ動きで、魔物の顔面にダブルキックを喰らわしたのだ。

二人の鉄靴はそれぞれ異なる色で発光していた。魔力で威力を増幅された蹴りを受けた魔物は、派手に吹き飛んで広間の壁に叩きつけられる。

その衝撃で、先程ハスキーに刺された傷口から、あの黄緑色の体液が再び溢れ出した。

魔物はそのまま下の固い地面にベチャリと落ちた。魔物はしばらく痙攣していたが、やがて力尽きて完全に動かなくなった。

魔物の流れ落ちる体液は、地面に流れ落ちると白い煙と音を立てて、地面を溶かし始める。流れ落ちたその部位に、瞬く間に穴が出来ていった。

「酸の血かよ……。おっそろしい奴」

「酸の血……アマミヤさんの言ってた竜に似てますね」

この現象を見たシバ達は驚いたというより、何やら感心したような口調で魔物を見下ろす。

「まあ確かに恐ろしいよな。こいつと戦うときには接近戦は避けたほうがいいみたいだな……。返り血を浴びたりしたら、かなりやばいぜ」

二人が冷静に観察している最中、研究所の奥から複数の人間の叫び声が聞こえてきた。
常人には何も判らないであろうが、魔法訓練により強化された二人の聴覚は、僅かながらもその音を読み取って見せる。

広間の一角にある左側の通路の方から、「ぐわぁあああ！」とか「助けてくれ！」という明らかな悲鳴が重複して聞こえてくる。
二人は当然これに驚いたが、それらの声は嵐のようにあっさりと途絶えた。
研究所内が再び元の静寂に包まれる。

「トサ……、あたし今さ、すっげえ嫌な予感がして来たのよね……」
「さっきも同じこと言いましたよ」

二人は顔を見合わせた。鉄兜で見えないが、二人の顔はかなり青ざめているだろう。

「それでどうします？　持ち場に戻るます……？　今回はシバの判断に従うよ」
「こういうときに限って、そういうこと言うのね、お前……」

シバは溜息一つつくと、ポンと両手掌を叩いて答えた。

「奥に進むぞ。さっきのチビ助もどのみち連れ出さなきゃいけないし……」

トサが頷くと、二人は言葉通り研究所の奥に前進していった。途中シバが「蒸し暑い」と言って装着していた鉄兜を脱ぎ捨てた。
緊張していたの最初だけであった。どんな危険があるかも判らない、未知の場所に進んでいるにも関わらず、シバは遠足にでも行くかのような軽い足取りだ。

あの山脈を冒険心から登りきった（同郷の友人を巻き込んで）ことがあるシバは、この手の探索は望むところだった。

ただし彼らが向かった先は、悲鳴が聞こえてきた左側の通路にではなく、少し前にハスキーが通った右側の通路に、であった。

第四話　怪物の牢獄

魔物達は足元に転がっているウルフ隊の亡骸を後にして、中央研究室の入口に前進していった。
内部に入ってすぐの位置に、先程ウルフ隊が運び込もうとしていた棺が置き去りになっている。

一匹が棺の錠前に顔を近づけると、口を開けて喉奥から舌を吐き出した。四本の牙が生えそろう第二の口がついた舌の先端が、勢いよく錠前に激突する。
それは一回ではなく、槍のように引っ込みを繰り返して、錠前を幾度も攻撃していった。ドカンドカンと地味で小さな音が繰り返し発音される。

だがウルフ隊の甲冑などとは違い、錠前は一向に壊れてくれなかった。自分達で破壊するのは無理と判断したらしい魔物は、その棺から引き下がろうとする。
その時、その魔物にとっても予想外であろうことが起こった。

近くにいた別の魔物が、尾をしならせて、突如棺の前にいた魔物の身体に、勢いよく尾先で突き刺したのだ。

「ピギャァァァァァァ！」

左の脇腹に突き刺さった尾先はすぐに引き抜かれ、傷口からドバドバと大量の体液を流れ落ち、地面を深く溶かしていく。
同胞の突然の攻撃に、怒りを震わせた魔物は相手に振り向こうとするが、今度は別の方向から尾先の刺突を受けた。
その魔物は二匹の同胞から、左右両面からの攻撃を幾度も受ける。グチャグチャとアイスクリームをかき回すように、体液が噴き出て零

れ落ちる

十回以上も身体を刺された魔物はついに倒れる。死んだようだ。

するとまた別の一匹が、その瀕死の身体を前足で持ち上げた。

その魔物は意外と器用な動きで棺の側まで持っていく。そしてペンキ事故にでも遭ったかのように、黄緑の体液がベッチョリとついたその魔物の身体を、棺の錠前の部分に擦り付けた。

ジャァアアアアアッ！

体液が付着した錠前を含む棺の部位は、見る見る黒く染まっていき、やがて溶け出した。

ちなみに身体を貫かれた同胞の身体を支える魔物の身体にも、体液をかなり浴びていたが、何故か魔物の身体には何の変調が起こらなかった。どうやら自己種族の体液の溶解力には耐性があるようだ。

錠前が跡形も無く崩れ落ちると、まるで打ち合わせていたかのようにまた別の一匹が、棺の横に回り蓋の縁に手をかけて持ち上げ始める。

錠前が無くなった棺の蓋はあっさりと空き、パックリと開かれた。

開放された箱の内部からは、雲のような大量の白い冷気が、一斉に噴き出してきた。

しばらくその場は視界がかなり悪くなったものの、暖房が利いた室内で冷気はあっという間に掻き消えて、箱の内部が露になっていく。

箱の内部は、先程ウルフ隊が見つけた空箱と同様に、十箇所の仕切りに分けられていた。そしてそれぞれの内部には、奇妙な虫（？）が納められていた。

それは本当に奇怪な姿であった。全身は白一色で、人間の顔と同じくらいの大きさの、平面状の身体であった。
その形状は蜘蛛に近いと言えなくもない。ただし左右に四本ずつの足が伸びてはいるものの、目や口に相当する部位が無かった。その点では今この部屋にいる魔物に似ているともいえる。
尻部からは筋の入った尾が、蛇のように長く伸びていた。胴体と尾の付け根の辺りには、人間の耳たぶのような部位が生えている。

そういった生き物が十匹、それぞれの区切りにいずれも異なる格好で氷漬けになって押し込められているのだ。
魔物達は棺の中に手を伸ばし、その生き物を一つずつ外に取り出していった。
地面に置かれた氷漬けの生き物は、部屋の暖かい空気に触れて、徐々に氷が溶け出していった。

「十一月十二日午前三時十分、中央研究室にて開閉された〝棺〟と呼ばれるオーパーツより、十体の冷却された未確認生物が発見される。研究員の一人が火の魔法で解凍を試みたところ、突如この生物が覚醒し、中央研究室にいた所員達に襲い掛かった。この生物は所員の顔面に吸着し、以後完全に静止する。所員はそれと同時に意識を喪失。被害にあった所員達十名は、直ちに医務室に収容される。生物は隔離されたものの、所員達は未だ意識は戻らず……」

トサは手にした診療簿を淡々と読み上げる。この後の文章には、引き剥がされた生物はそのまま死んでしまっていたという事実と、その後の患者の容態を記した追加報告が記されていた。
ちなみに最初に書かれている日付、十一月十二日は今日である。

「大体事態が飲み込めてきた気がしてきた……」

トサは診療簿を全て読み上げると、それを粗雑に近くの机に置いた。そして傍で話を聞いていたシバと顔を見合わせる。

現在二人はこの研究所の医務室の中にいた。そしてすぐそこの扉の向こう、この医務室の隣には、例の患者が寝かされている病室がある。

二人が病室を覗き込む。病室の中には白いベッドが並び、十人の患者の遺体が寝かされていた。彼らは皆、腹部に内側から破られたと思われる穴が開いている。

シバは先程医務室の中で見つけた、例の生物の死体を持っていた。長い尾の途中を干し柿のようにつまみ上げ、ダラーンとぶら下げられた蜘蛛のような平らな身体が、シバの顔の前にぶら下げられて、プラプラと揺れていた。

シバはこの生物と、患者の遺体を交互に見詰め、何かに納得したかのように首を曲げた。

「ようするに、だ……。オーパーツから出てきたというこの変なのが、あの化け物が脱皮した抜け殻ということか？」

「そうなんじゃないでしょうか？　この遺体は意味わかりませんけど……」

答えたトサの口調は、何処となく投げやりであった。

不意に二人は、今しがた自分達の出てきた医務室のドアに目をやる。そこには先程二人から逃げ出したあの半透明の少年が、飾り物の人形のようにひょっこりと立っていた。

「今度は逃げないのね？」

少年はどこか緊張した面持ちで、コクリと首を縦に振った。
シバが色々と、かけるべき言葉を考えている素振りを見せている間、トサが先に口を開いた。

「聞きたいことは山ほどあるんだけど……。とりあえず、君はヤマトにいたあの幽霊ですよね？　俺たちもあの土地出身で、あなたの姿も一度だけ見たことがある」

この問いに少年の顔が曇った。少年はしばらく黙っていたが、シバが顔を近づけると、ようやく口を動かし始める。パクパクと何かを喋っているような動きであったが、その口からは声が出ていない……。

「喋れないの？」

少年は残念そうな顔で、肯定の意思で首を振る。

「シバ。お前、読唇術とか使えたりしない？」
「無理」

シバはキッパリと答える。二人が悩んでいると、少年がトサの手を引っ張り、医務室の扉を指差す。そしてすぐに手を放し、医務室の中へ入っていった。

「何だ、いったい？」

二人が再度医務室に入ると、あの少年が医務室の奥の右側にある扉を指差していた。二人がこれを見たことを確認すると、少年は扉を開けて、その中に入っていった。
二人は怪訝な表情で顔を見合わせた。この扉の存在は、さっき入っ

たときに気付いていたが、病室にあった死体と、医務室の医療記録を調べることを優先したため、まだ中を確認していない。
二人は無言で、少年を追ってドアの向こうへと歩を進めた。

二人はドアの向こうの通路を黙々と歩いていった。
迷路のよう、というほど大袈裟ではないが、途中分かれ道が二つあり、廊下の壁にはいくつもの部屋の扉があった。二人は少年が進んでいる先を追って、行く道を選択して前進していく。やがて二人は、その道の最終点にたどり着く。

そこには大きな金属製のドアがあった。大きさや形状は、中央研究室のものと全く同じであったが、こちらは向こうとは違い、固く閉ざされている。
ドアの上の看板には、『生物研究・保管室』と書かれている。

「ここに入れっての？　あたしら鍵なんて持ってないよ？」

少年はスタスタとドアに近づき、両手をドアにくっつけた。少しの間、何かを念じているかのような様子を見せると、少年の身体に変化が見られた。

「え？　消えてる!?」

元々透けていた少年の身体が、更に透明度を増していっているのだ。まるで今にも消えてしまいそうな状態変化である。
まるでガラス瓶のような透明度までになると、ドアにつけていた手が、ドアにめり込んだ!?　いや、めり込んだのではない。ドアの中を、少年の身体が通り抜けている！

「お、おい!?」

少年の身体はドンドンとドアの中へ入っていき、その姿が完全に消えてしまう。

ガチャリ！

二人が呆然として、少年がいた後を眺めていると、突然ドアから音が聞こえてきた。

何となく事態が飲み込めてきた二人は、さっきまでは鍵がかかっていたのであろうドアに手をかけ、力いっぱい引いた。

ギギギギという鈍い音を立てて、巨大な金属のドアが開け放たれていく。充分開いた後、二人はドアの真ん前に再び立った。

部屋の入口のすぐ前には、先程の少年が立っていた。身体の透明度は元の状態に戻っている。少年はあのドアをすり抜けた後、部屋の中で再び実体化して、このドアの内側の鍵を外したようだ。

「こんなすごい幽霊だとは知らなかったな。空き巣とかするのに便利そうだ」

シバはすっかり感心して少年の頭を撫でる。それに少年は困ったような表情で、シバを見上げていた。

「うわあ……。ここも色んな意味ですごいな……」

部屋の中を見渡したトサが、はっきりと嫌悪感を露にする。

その部屋の大きさは大体中央研究室と同規模だった。ただし壁は金属製ではなく、この研究所の基本建材である黒い石造りであった。

そして部屋の中には、大小多くの頑健な金属で出来た動物用の檻が置かれていた。それらの中には、様々な奇怪な生物・擬似生物が、生きたまま閉じ込められている。

足が四本あり、尾羽の下からは蛇そっくりの爬虫類の尻尾が生えた、巨大鶏の『コカトリス』

鼻先に角が生えた、動物のサイのような姿をした、魔法の力で動く石像の『ガーゴイル』

頭が三つ並んで生えており、尾は生きた蛇（頭付き）になっている、ライオン程の大きさがある黒狼の『ケルベロス』

生前の魂が未だ宿り、肉が無くなり骨だけになっても動き続ける死人の怪物『スケルトン』

これ以外にも実に様々な生物が檻に入れられ、この広い部屋に無秩序に置かれている。

彼らは皆、飼いならされた番犬のように、驚くほど大人しくしていた。彼らを閉じ込めている檻は、ただ頑丈なだけの代物ではない。強い封印力を持った魔法の檻である。おそらくその効果によるものなのであろう。

「おい！　あれ見てみ！」

シバが動物園に来た子供のように、ある一つの檻を指差して興奮している。シバのおかしな反応にトサは怪訝な顔しながらも、言われるがままそこを見た。するとそこには彼もまた目を見張るものがあった。

「火霊獣《サラマンダー》じゃないですか！　すごい、俺本物なんて初

めて見た！」

その檻にいたのは巨大な蜥蜴のような生物だった。体格は人間の三十倍はあるだろうか？　全身を覆う鱗は、炎のように明るい赤色である。

頭部からは反りのある一本の鋭い角が、後ろ向きに伸びていた。その角の後ろ、首から背中を通り尻尾の先に至るまでに、頭部の角を少し小さくした感じの骨の背びれがびっしりと並んで生えている。

顔と目付きは狼のように鋭く、獰猛なイメージを一目見ただけで彷彿とさせる。

現在そのサラマンダーは、檻の魔力が効いているのか、見た目に反してかなり大人しくしている。二人に向けてチラリと目をやったものの、すぐに興味が無いかのように目を逸らした。

二人はこの生物を惚れ惚れと眺めた。

サラマンダーは竜族の亜種であり、大昔の伝承や民話にも多く登場するかなり知名度の高い生物である。だが実物をお目にかかった者はそう多くない。ましてや寒冷地であるウェイランドでそれを見つけ出そうなどと夢物語であった。

二人はそれをしばらく眺めていたが、ふとここに来た本来の目的を思い出し、気を取り直して再び部屋内を見渡した。

「実験動物の保管場所か。しっかし、これだけの化け物をこんな所に一まとめに置いておくたあ、随分ずさんな管理ね。お前もそう思わない？」

シバは壁際に置かれていた、この生き物のいずれかに使われている物と思われる、餌箱の中に隠れている気配の主に声をかけた。

トサがその厚紙でできた餌箱の前に立ち、ドンと一蹴りを喰らわせ

る。途端箱はドタドタと慌しく揺れて、ガバリと蓋を割って人が出てきた。

「ぶっ、ぶはあ！」

「こんにちは♪」

シバは、中からビックリ箱のように飛び出してきた、その白衣を着た初老の男性に、明るく挨拶をした。男性は緊張した面持ちで、シバの顔を凝視した。

「あっ、あんたらは……？」

大分落ち着いてきてもなお、男性は警戒した様子で、二人に恐る恐る質問する。

「俺達は王国特務部隊ウルフ隊の者です。救援の報告を受けてこちらに馳せ参じました」

トサの返答に、男性は安堵の息を吐いた。続けてトサが男性に質問する。

「ここで何が起こったのか、何か判ることは？」

「し、知らん！　突然所内にあの化け物共が出てきて、皆を次々と殺しやがったんだ！　外の結界には、何かがぶつかった反応は一度も無かったのに、いったいどこから入り込んできたのか……」

「それでここに隠れていたわけね。まあそっちの事情はよく判ったわ」

そう言って、シバは少年に顔を向けた。

「チビ助、あんたがあたしらをここに連れてきたのは、こいつを連れて

出して、この研究所からさっさと逃げろと、そういうわけ？」

少年は無表情で首を降ろす。それを見たトサが、ふと思い出したかのように男性に次の質問をした。

「あなたはここの研究員ですよね。それじゃこの子供のことは何か知っていますか？」

男性はそこいる半透明の少年をマジマジと見詰めた。やがて心当たりを思い出したのか、「ああ」と頷き、両掌をポンと叩いた。

「そういえば少し前に、物質化死霊《マテリアルゴースト》が一匹、ここに送られてきたと聞いたな。それがこいつじゃないのか？」

「そいつの出所は？」

「さあ……そこまでは私も知らん」

話を聞いていたシバが、大分侮蔑の入った口調で話しに入り込んだ。

「出所なんぞ、大体判るわ。エルダーに侵攻していった馬鹿共が、ヤマトの方から誘拐してきたんでしょう」

「ヤマト……？」

男性は聞きなれない単語に、首を横に曲げた。エルダー王国の名は当然のごとく知っていたが、ヤマトなどというものは、彼には初耳だった。

「まあいいや。そんなことよりお前、この部屋に立て篭もった意図は判るけど、無意味だったみたいよ。ほら、あれ見てみ」

シバは剣を抜き、切っ先を天井の一角に指し示した。三人は剣先か

ら目を追って、そちらを眺める。
そこにはこの部屋の空調換気扇の窓があった。
だが現在その窓の網は、外側から見事に破られており、壊れたプロペラがワイヤーに引かれて無残にぶら下がっていた。

第五話　蜘蛛と髑髏

「あんなところに出入りできるような場所があったんじゃ、あの金の掛かった分厚いドアも意味無いね」

それを聞いた男性の顔が、見る見る青ざめていく。

シバは剣に魔力を込めた。刀身が火の魔力を帯びて、赤く発光する。

事態に気付いたトサも剣に手をかけるが、完全に抜き放たれるより先に、シバが動いた。

「火突！」

ミノタウロスの入れられた高い檻の上。その方向にシバは、剣による〝突き〟を放った。

一見すると何もない空中を刺しただけのように見えるが、剣を持った右腕が伸びきり、切っ先が最前地点に到着したとき、そこから赤く光る炎の矢が飛ぶ。

炎の矢は銃弾のように高速で飛んだ。その向かう先、檻の真上には何とあの魔物がこちらを眺めながら座り込んでいた。

「ピギィ！」

魔物はシバの動きに咄嗟に反応し、飛び跳ねるようにして右横に動いて炎の矢をかわした。標的を外した矢は、向こうにある部屋の壁に命中し、そこに真っ黒に焦げた円形の穴を作る。

「うわぁあああああああ！」

魔物の姿を見た男性は驚き慄き、一目散に逃げ出した。

「ああっ！　馬鹿！　戻れ！」

トサが制止の言葉をかけるが、男性は先程空けられた金属のドアを通り抜けて、どんどん姿が小さくなっていく。

そうしている間にも、シバは魔物目掛けて次々と火の矢を放つ。魔物はいくつもある檻の上を走り、飛び移り、攻撃から逃れていった。部屋の壁にボスボスと、いくつもの穴が開いていく。

（埒が明かないわね……。ようし！）

突如シバが走り出した。この行動に魔物も僅かに動揺し、足を止める。

シバは常人離れした脚力で力いっぱい飛び跳ね、魔物が立っている檻の、すぐ隣にいる檻の上に着地する。

「正面から堂々と行くわよ！　のっぺらとかげ！」

近距離に接したシバと魔物は、そこでお互い睨み合いを始めた。だが直ぐに魔物の方から動き出した。

魔物は自身の長い尾を、鞭のように動かしてシバに向けて振る。シバは即座に背中を曲げ、それを紙一重でかわした。

魔物はその後も、同じような攻撃を次々と繰り出した。シバは必死に動いて、それらをギリギリでかわして行く。

間合においては、シバの装備している刃渡り七十センチの剣よりも、魔物の数メートルの尾の方が遥かに有利である。

だが間合が長い分、返りが遅い。シバはそれをうまく読み取り、何とか反撃の瞬間を見極めようとする。

ある時、魔物の大振りをよけたシバは、その間の隙をついて魔物に向けて突撃した。だが勢いよく振られた魔物の尾は、完全に横に飛ぶ前に突然急停止して、そのまま逆向きに動いてシバに襲い掛かった。

（のわ!?）

突然足元に「バシ！」という音と、強い衝撃による痛みが走った。魔物の尾は、シバの足元に命中していた。足を払いのけられたシバはバランスを崩し、思い切り仰向けに倒れこむ。

魔物はその場で飛び跳ねて、倒れたシバの上空に出現する。シバの視界に落ちてくる魔物と鋭い尾の先端が、こちらに落下してくるのが映った。

シバは即座に全身を右側に横転して、その攻撃をかわした。魔物の尾先が一瞬前までシバが寝ていた位置の、檻の屋根に突き刺さる。

「ピギャァァァァ！」

魔物は食い込んだ尾先を引き抜こうと、尾全体を陸に上がった鰻のように振り動かした。そうしている間にシバは、倒れこんだ体勢のまま、魔物の横腹目掛けて横蹴りを食らわした。

その衝撃で魔物は檻の上から転げ落ちる。その拍子に食い込んだ尾先も抜けて、魔物の身体が地面に二転三転していった。

「うわ！」

魔物が転がり落ちた直ぐ側に、トサが立っていた。彼は魔物と接近戦を始めたシバに対し、中々加勢の機会を得られず、ずっと傍観していたのだ。

起き上がった魔物は、シバにではなく、今一番近くにいるトサに顔を向けた。トサは咄嗟に魔物の攻撃に構える。

「離れろ！　トサ！」

魔物がトサに襲い掛かる前に、シバの声と共に巨大な炎が魔物を包んだ。

シバは檻の上から下方にいる魔物に剣を向け、火の魔法を放ったのだ。剣全体から凄まじい炎が溢れ、それが直線状に飛んで魔物に直撃した。

ブォオオオオオオオオオッ！

強力な火炎と熱気に、トサは魔物のいる位置から逃げる。シバの放った炎の光は部屋全体を赤く照らし、屋内温度すら急上昇させる勢いであった。

「ギシャァアアアアアア！」

魔物は悲鳴を上げ、火達磨になってのたうち回る。

やがてシバの剣を覆っていた炎は全て出し切られ、魔物にかけられていた火炎熱線は止んだ。

全身を焼かれた魔物は、弱りきり、その場でうつ伏せに倒れ付した。

（やったか……？）

敵は死んだと判断したトサは、倒れた魔物に向かって一歩踏み込んだ。

その時だった。一時はもう死んだと思われた魔物が、突如起き上がりトサに飛び掛ってきた。

「水結界！」

トサはこれに迅速に反応し、目の前に魔法による水の壁を張って、魔物の突撃から防御する。魔物はこの壁に激突し動きを止めた。

「はあ！」

トサは更に剣を振り、水の壁を激水にかけて魔物に放水する。魔物は全身に水を浴びて吹き飛んだ。

ジュァァァァァァァァァ！

強く熱せられた魔物の身体にかけられた水は、瞬時に蒸発し、魔物の全身を水蒸気で包み込む。それと同時に魔物は絶叫を上げた。

「ピギィイイイイイイ！」

シバは地面に降りて、もう一発火炎熱線を放とうと、魔物に剣を向ける。

その時、おかしな事が起こった。

ピキピキ！

風呂上りのように湯気を立てまくっていた魔物の身体の各部から、音を鳴らしながら、ヒビが入り始めたのだ。

シバとトサ、更に幽霊少年を加えた三人が、何事かと目を見張る。

パァン！

突如魔物の身体が、実に気持ちの良い音を立て、針を刺された風船のように破裂した。

辺りに肉片が飛び散り、魔物は跡形も無く粉々になる。なおこの肉片に触れて溶けてしまう物は何も無かった。

「……何？」

飛んできた魔物の皮の一部が目元に張り付いたまま、シバは目をパチクリとさせ、独り言のようにそう呟いた。もちろんこの疑問に答えられる者は、この場には誰もいなかった。

「まあ……やっつけたということでいいんじゃないの？」

しばし呆然としていた一同であったが、最初に放たれたトサの言葉に、シバと幽霊少年は口を開かずに首を縦に振る。

「とりあえず、あの馬鹿を探さないとな。全く考えなしに逃げ出しやがって……」

「それにしてもシバ、いつの間にかすごくなってますね……」

シバの言葉に頷きながら、同時にトサはシバに感嘆の言葉をかける。

「何が？」

「俺、あいつの気配に全く気がつかなかった……」

「そりゃあ、私もそれなりに鍛えてるからね。いつまでもガキの頃のままだと思うないでよ。というかこんなこと話してないで、さっさと行くよ」

そう言って先程逃げ出した男性を探そうと、シバとトサが部屋から出ようとする。すると幽霊少年が、二人を遮るようにして目の前に進み出た。

「どうした？」

幽霊少年は何かを訴えるような面持ちで、二人に右腕を差し出した。拳には十本以上もの銀色の鍵が纏められた、リング状の鍵束が握り締められている。

幽霊少年はそれを二人に見せると、次に部屋全体に置かれた檻を見渡した。相手の言わんとしている事を大体察したシバが、難しい表情で問いかけた。

「これはあの檻の鍵か？　もしかしてこの部屋にいる奴らを逃がしてやれと？」

少年はコクリと首を動かした。

シバは「仕方ないわね」と一言口にして鍵束を受け取った。これにトサが少し焦った口調で言い咎めた。

「正気ですか⁉　錠を外した途端、こいつら暴れ出すかもしれないよ！」

「だからこいつは私らに頼んでるんだろ？　三人で手早く全部の錠を外して、素早くこの部屋から逃げればいいだろ？　どっちみちこのままにしておけば、こいつら全員飢え死にか、または殺傷処分だ。それじゃ後味悪いだろ」

シバは一寸の迷いも無く、得意げに言い放つ。

彼らが自分たちに危害を加える可能性・外に出た者たちが、一般に被害を与える可能性など、深い部分はあまり考えていない。

怪我をした動物を助けるのと同じような軽い感覚だ。

鍵にと檻には、それぞれ対応しているものがすぐ判るよう番号が刻まれている。トサはやや面倒にしながらも、その鍵の何本かを受け取った。

先程部屋から逃げ出した男性は、所内を何の考えも無く、ただ我武者羅に逃げ回っていた。

（たっ、助けてくれえ！　もうあんなのは嫌だ！）

もうどの辺りかも判らない廊下の中を、男性は途中でバランスを崩して倒れこんだ。

「うう……、うん？」

片足を痛めたようで、男性はうまく立ち上がれない。そんな最中、男性の視界に一瞬奇妙なものが映った。

それは先程の魔物とは、明らかに違うものだった。何か白くて小さなものが、天井の辺りをカサカサと動いたところを見た気がしたのだ。

（何だ……？）

本当に一瞬だったのではっきりとは見えなかったが、それは蜘蛛に似ていたような気がした。ただ蜘蛛にしてはあまりに大きすぎるサイズであった。

珍妙なものを見たせいか、男性の頭の中は徐々に冷えてくる。さっき見たものをきちんと確認するため、その物体が動いた先の後ろの天井を見ようと男性は振り返った。

（へ？）

振り返った途端男性の目に、真ん中に小さな穴がポツリと開いた、白い蜘蛛のような生物の腹が正面から飛び込んできた。

ベチャリ！

飛び込んできた白い生物は、男性の顔に腹を張り付けた。足を後頭部に回して握り締め、ガッチリと自身の肉体を、男性の肉体に固定させる。さら後ろに生えている長い尾を、男性の首に巻きつけて強烈な力で締め付けた。

「んっ、んんんん!?」

男性は顔と首、両方を攻められて、凄まじい窒息感に苦しめられる。両腕で生物を掴み上げて、何とか引き剥がそうとするが、生物は男性の身体の一部にでもなったかのように吸着し、全く離れない。

やがて男性の意識は遠のき、パッタリとその場で倒れ付した。

ほんの少し前まで不気味な程の静寂を保っていた研究所は、現在はまるで戦争でも起こっているかのように騒がしくなっていた。

もうあちらこちらでズドン！ドガン！と何かが派手に壊される音と、奇怪な獣の鳴き声が、アンサンブル演奏のように響き渡る。

そんな中、研究所のある場所の廊下の中を、トサ・シバ・幽霊少年の三人が走っていた。

「キー！　キー！　キーー！」

彼らの後方からは、五体のスケルトンが剣を振り回し、その骨だけ

の身体からガシャガシャと皿を鳴らすような音を立てて三人を追っていた。

「いやいや、完璧だと思ったんだけどな。こいつら動き出すの早すぎ」

「はいはいそうですか」

『……』

怪物に追われているというのに、いつもどおりの呑気な口調でシバが喋り、トサが呆れ顔で返答する。幽霊少年は相変わらず無言である。

幽霊少年から鍵を受け取ったシバ達は、それぞれの鍵の相対する檻を事前に詳しく調べ、三人で手分けしてかつ手早い動きで檻の錠を外していった。

封印が解けて、檻の主が力を取り戻して出てくる前に、全ての檻を外し終わり、即効で部屋から出るつもりだった。だがスケルトン達は、途中で封印を解かれたにも関わらず、復活が早く、今こうして檻から出てきて三人に襲い掛かってきている。

一見危機的な状況に見えるが、何故かこの現状において、シバだけでなくトサも余裕の表情だった。

あのレベルのスケルトンならば、彼らにも充分倒せる相手であった。三人が逃げているのは、彼らと戦闘を行っている最中に、別の怪物が自分達に襲い掛かってくる可能性を考慮してのものである。

そのため三人は、あの部屋から少しでも距離を取ってから戦うために、スケルトン達から逃げていた。

だがその最中、急に前方を見ていた二人の顔が険しくなった。

「シバ！」

「判ってるわい！　チビ助、手で顔を隠しときなさい！」

二人は手に持った剣に魔力を込める。それぞれの刀身が、赤と水色に発光した。
魔法によって鍛え上げられた二人の動体視力は、廊下の奥から横壁を走りながら自分達に接近してくる、複数の白い存在を確かに捉えた。
遠目で形ははっきりとは判らなかったが、二人は確信していた。あれは医務室で見たものと同じ寄生生物だ。あの時は既に死体だっが、今は生きているものが、こっちに迫ってくる。

あっというまに両者は間近に迫った。数は多い、十匹近くはいるかもしれない。突如三匹の寄生生物が飛び跳ねて、シバ・トサ・幽霊少年の三人の顔面に掴みかかろうとする。

「はっ！」

シバとトサは同時に魔法を放った。両者の剣から、それぞれ火と水の矢が一本ずつ飛ぶ。
魔法は見事命中した。二体の寄生生物は魔法の矢をまともに喰らい、飛び掛った向きとは逆方向に数メートル上向きに飛び、天井に激突して砕け散った。

だが飛び掛った残りの一匹は、見事に幽霊少年の顔に見事に吸着。寄生生物は幽霊の少年の半透明の身体に取り付き、首に尻尾を回した。
他にいた壁を伝っていた五匹は、何故かシバ達を素通りして行った。

『……！　……!!』

寄生生物に張り付かれ転んだ幽霊少年は、仰向けの姿勢のまま、自

身の顔に引っ付いた寄生生物を引き剥がそうとしながらもがき苦しんでいた。

「馬鹿野郎！　顔を隠せと言ったろうが！」

シバ・トサが慌てながら、二人で寄生生物の前足を掴み引っ張り出す。

するとどうだろう。幽霊少年にくっ付いていた寄生生物は、テープを剥がすようにベリ！と鳴らして、幽霊少年の顔から実にあっさりと離れてしまった。

意外な事象に二人は僅かに驚く。あの診療簿には、あの寄生生物は人間の顔に張り付いた時には数人がかりで引っ張っても引き剥がせず、外科手術でようやく切り離せたと記載されていたのだが……。

相手が霊体だからであろうか？

「くたばれ……」

シバが静かにそう口ずさみ、手元に魔力を収束させた。寄生生物を鷲づかみしたシバの掌から、強烈な火と熱が放たれる。

寄生生物はひっくり返された昆虫のように、足をバタバタ動かしながら炎に包まれる。やがて真っ黒な炭になって動かなくなった。

ふと後ろを見やると、少々滑稽な光景が出来上がっていた。

素通りして言ったあの寄生生物たちは、スケルトンの顔面にくっ付いていたのだ。あの骨だけの頭にへばり付いて、細くて白い首にしっかりと尻尾を回している。

スケルトン達は尻尾を掴み上げ、引き剥がそうとするが、幽霊少年の時とは違って中々離れない様子。するとスケルトン達は一斉に剣を振り、自身の顔についた者に剣先を付き立てた。

胴体を串刺しにされた寄生生物たちは、張り付いた姿勢を崩さないまま痙攣し始めた。身体からは魔物と同じ黄緑の体液が流れ、スケルトンの頭蓋と剣を濡らし始める。

するとそこからジュワ！と何かが焼けるような音が響いた。
スケルトン達の、寄生生物の体液が付着した部分が溶け始めたのだ。これにはスケルトン達も慌てふためき、オドオドと踊るように廊下の中を動き回る。
死んだと思われる寄生生物たちは、自然と剥がれ落ち、ペチャリと地面について床を溶かし出す。

スケルトン達の頭蓋骨はほとんど溶けてしまっていた。
首なし骸骨達は、しばらくの間フラフラと酔っ払いのように歩き回っていたが、やがて魔力で固定されていたと思われる骨格が崩れ落ち、バラバラになって床に転がっていった。

第六話　石像と鶏

研究所のある場所の広い一室。
そこにはとても長くて大きく、高級そうな質感のテーブルが置かれ、それの回りには、これまた高級そうな黒塗りの椅子が並べられていた。
奥には一段高めになっている床の上に、ウェイランドの国旗が掲げられた演台が置かれている。床には綺麗な絨毯が敷かれており、部屋の大きさから見て、ここはこの研究所の大会議室であるようだ。

その部屋の中に、どこからかズンズン！という何かの足音のような音が聞こえてきた。
音源は部屋の外のようで、音自体はそれほど大きくない。だがその雷鳴のようなかなり鈍重な響きは、この無人の広間の中ではかなり耳につくだろう。

そんな時、部屋の一角の壁が、突如として爆発したかのように破壊された。
砲声のような音と共に、大量の砂埃が舞い、大量の石の欠片が雨のようにあちこちに飛び散る。砂埃が止むと、壁に開けられた大穴から岩のような巨体が現れた。

岩のような巨体は比喩ではなく、本当に岩であった。部屋の中に現れたのは巨大な石像だったのだ。

体長はおおよそ四メートル、肩の高さは二メートル近くある四足歩行で、とてもがっちりした体格である。
首は非常に短くて太く、長めの頭の鼻先からは天を刺すような立派な角が二本前後に並んで生えていた。角は前方の物が長く、後方はとても短くて小さな瘤のように見える。

目は赤く淡く発光していて、何らかの魔道水晶が埋め込まれていることが推察される。

大まかに見て、その外観は動物のサイを象ったもののようだ。
だがあまり精巧な造りではなく、表面はどこにでもあるボコボコした石の質感そのままであった。遠くから見るとただの岩の塊のようにも見える。

その岩の塊は、こともあろうか動いていた。
四本の太い足を普通の動物のように動かして、ズンズンと前進している。歩くたびに絨毯が破かれ、足元の床石に亀裂が入り、浅い穴が出来上がる。

この生物（？）の正体は、擬似的な意思と魔力を宿した魔道石像『ガーゴイル』であった。
ガーゴイルは壁という壁を破壊し、幾つもの廊下を突き抜けて、この研究所を徘徊していたのだった。

広い空間に出たガーゴイルは辺りを見回すと、今この部屋にいるのは自分だけでは無い事に気がついた。
演台の向かいの正面に、この部屋の本来の出入り口であると思われる大きな扉があった。
現在その扉は、張りぼてのようにグシャグシャに破壊されている。
そのすぐ前に目の無い顔と、鞭のような尾を持った、あの魔物がいた。

「シーーーー！」

目は無いのだが、魔物はガーゴイルに対して睨みつけるような姿勢をとっており、低い唸り声を上げて威嚇する。口元の皮が揺れ、突き刺すような音が立つ。
下唇からは涎のような透明な粘液が垂れ落ちており、ポトポトと床

を濡らす。

ガーゴイルは自分に対する明らかな敵意を感じたようで、肩を下げ、前方の角を魔物の方向に突き付けて臨戦態勢をとる。ガーゴイルは鳴き声というものは出さないらしく、その動きも実に静かなものであった。

「ギシャア！」

魔物が威嚇の声を上げると、ガーゴイルが前足で床をけり、魔物に向かって一直線に突撃した。何トンあるかも判らない、その大岩の肉体が、とてつもない速さで魔物に接近してくる。

「ピギャァァァァ！」

咆哮一声、ガーゴイルが間近に迫ったとき、魔物はとてつもない跳躍力で、上方数メートルの高さまでに飛び跳ねた。

突進したガーゴイルの身体は、空中に浮いた魔物の足元を通り抜け、勢いのままに奥にある部屋の出入り口にまで突き進んでいく。

壊されていた扉は、ガーゴイルに踏み潰され、更に粉々に破壊される。

広い廊下の中にまで飛び出したガーゴイルは、両足を突き出し、床にこすり付けて急停止しようとした。

ズザザザザザッ！

両足の踵が床石を削り、その摩擦でガーゴイルの突進の勢いは弱まり、ようやく止まった。

ガーゴイルは魔物の方向に向き直ろうと、胴体を曲げて方向転換を始める。ガーゴイルの視線が元の方向に向いた時、あの魔物がすぐ目

の前に接近していることに気がついた。

「ピギィイイ！」

ガーゴイルの真横の位置についていた魔物は、長い尾を引き締めて、槍のような先端を猛烈な速度で一気に突き出した。

ガス！と鳴らして、刃のような尾先が、ガーゴイルの太い首に深く喰い込んだ。

完全に致命傷である。通常の生物であれば、首から大量の血が垂れ落ち、気管が繋がらなくなって確実に死ぬ。

「……」

……だがガーゴイルはそうならなかった。悲鳴を上げないのは当たり前だが、何故か血も流れず、息が切れたりもしない。

当然といえば当然の結果である。石像のガーゴイルの身体に血は流れていないし、元より呼吸もしていない。ただ首部分に小さな亀裂が入り、パラパラと細かい欠片が下に落ちるのみであった。

「ピギャ!?」

これに驚いたのか、魔物は直ちに貫いた尾を引き戻そうとする。だが巨大な岩の中に入り込んでしまった尾先は、どんなに力を入れても全く抜けることがなかった。

ガーゴイルは首を振り、全身をさっきとは逆方向に猛回転させた。

「ギギャアアアア！」

ガーゴイルの円回転によって魔物の尾は引っ張られ、それによって魔物は全身を宙に持ち上げられた。

魔物はガーゴイルの動きに合わせて、ハンマー投げのように豪快に

振り回される。その勢いで魔物の尾先は、通水カップのようにスッポリと抜けた。

魔物の身体は大きく投げ出され、広い廊下の壁に叩きつけられた。分厚い壁の表面が削れ、崩れ落ちた壁石の欠片と共に床に倒れ落ちる。

痛手のためか、魔物が床上を魚のようにジタバタともがいている間に、ガーゴイルが角を構えて魔物に向けて再突撃した。

魔物が起き上がったと同時に、突進してきたガーゴイルの角が、魔物の腹を串刺しにした。

グシャリッ！

魔物の背から、ガーゴイルの角の先っぽが、大量の黄緑の血を噴出させながら一気に生えてきた。

魔物の身体はガーゴイルと共に突き抜け、先程魔物に激突した壁に再び追突した。

魔物と一体化したガーゴイルの頭部が、壁に深くめり込む。削れた壁は更に砕け陥没し、魔物の身体は卵のようにグチャグチャに潰れてしまった。

これにより魔物は死んだが、致命傷を負ったのは魔物だけではなかった。

ガーゴイルは壁から頭部を引き抜いたが、何とあの特徴的な角が両方とも無くなっていた。

角だけではない。頭から肩にかけてまで、魔物の体液が大量に付着したガーゴイルの身体は、見る見る溶解し、表面が崩れ落ちていく。

やがてガーゴイルの前半身は、泥人形のように脆く崩れ落ちた。

頭と肩が削げ落ちたガーゴイルは、折れるようにして前足が後半身

から落ちて倒れこみ、完全に機能停止した。

研究所のある場所の長い廊下の中。そこには一羽の怪鳥が立っていた。

その怪鳥は鶏だった。しかしただの鶏ではない。背丈は人間の大人ほどの高さがある巨大鶏であったのだ。

全身の羽毛は黒く、鶏冠は赤い。その鶏冠の形状と大きさから、この怪鳥は雄鶏であることが判る。体格は家禽として飼われている鶏のようにでっぷりと太ったものでなく、スラリとした闘鶏のように引き締まった体躯であった。

この怪鳥の特徴は大きさだけではない。横から見るとよく判るが、この怪鳥の最も目立つ部分の一つは足である。岩さえ切り裂けそうな鋭い爪が生えた、その灰色の屈強な足は四本もあったのだ。

鶏に限らず、鳥類の足は総じて二本のはずである。だがこの怪鳥は何故か四本。翼を含めると、この怪鳥は肉体の肢部分が六本あることになってしまう。

もう一つの特徴は尻尾である。〝尻尾〟とは尾羽のことではない。尾羽はあることはあるが、この怪鳥には尾羽の下の尻部分から、明らかに通常の鳥類には無い、長い尻尾が生えているのだ。

その長さは怪鳥の胴体よりも長く、表面には爬虫類のようなザラザラした鱗が生えている。その鱗の質感を見ると、この尻尾は蛇の胴体に酷似していた。

この怪鳥は『コカトリス』。普段は岩場に住み、時に人間を襲うとも言われている魔道生物である。
コカトリスは四本の足をそれぞれ交互に動かしながら、傍らから見ると滑稽な動きで廊下の中を歩行していた。

現在コカトリスがいる廊下には、十数人の白衣を着た人間が倒れていた。この研究所の研究員達である。
彼らの姿は実に悲惨なものだった。
ある者は背に動物の引っかき傷と思われる、四本の切り傷がついている。ある者は槍に貫かれたかのような、大きな穴が胸や腹に開いていた。ある者は前述のものよりも小さめの穴が、頭部の眉間から後頭部を通る形でポッカリと開いていた。

彼らに共通していることは、皆血みどろで真っ赤に染まり、息をしているものは誰一人としていないということであった。
コカトリスは、背に引っかき傷をつけて、俯けに倒れている研究員に歩み寄った。そして頭を下げ、自身の剣先のように鋭い口ばしを、研究員の後頭部に突っつける。
当然のごとく、研究員は微動だにしない。

「シャァァァァァァァ！」

コカトリスは頭を上げると、突如喉を鳴らし、奇怪な声を上げた。
外見に見る鶏の鳴き声とは全く違う、蛇のような低い鳴き声が、廊下内のそれほど広くない空間を伝っていく。

するとコカトリスは、先程突っついた研究員の亡骸をボールのように蹴り飛ばした。右側の強靭な二本の足に蹴られた研究員は、高々と宙を舞い、マネキンのように床に転がっていく。
その後もコカトリスは倒れている、研究員の冷たい身体を次々と蹴り飛ばしていった。

その眼には、明らかな怒りの感情が読み取れた。これだけでこのコカトリスが、この研究所の人間にどれだけの恨みを重ねていたか、よく判る。

コカリトスが物言わぬ死体を痛めつけている廊下の空間。その廊下の天井に何とあの魔物がいた。

天井の表面に蝉のようにベッタリと張り付き、石像のように硬直して動かず、気配一つ発していない。

この廊下には電灯は無く薄暗いため、余程周囲を細かく観察しない限りは、ほとんどの者はその魔物の在中に気が付かないだろう。

暴れるコカトリスは、やがて魔物の真下付近に近づいた。途端今まで静止していた魔物が初めて動き出した。

動いたといってもそれは尾の部分だけ。しかもそれは一寸の音も立てず、釣り糸のようにスーと下降していく。前向きに少し反り返った、鎌の形にも見える尾の先端は、やがて下で研究員の死体を足蹴にしているコカトリスの背後に迫った。

尾に力が込められ、今まさにコカトリスの身体が貫かれると思われた瞬間、突如としてコカトリスが瞬間的に動き出した。

「シュァァァァァァァ！」

四本の足を器用に動かし、全身を独楽のように百八十度回転させ、魔物の尾先に自らの顔の先を衝突させた。

「ギギャ!?」

さっきまで尾以外は微動だにしなかった魔物が、驚きの声を上げて反射的に身体を揺らす。

尾先は何と、コカトリスの強靭な口ばしにガッチリと銜えられていた。

動揺した魔物は尾を振り回し、コカトリスから振りほどこうとする。だがコカトリスの力もかなり強く、首を揺さぶられながらも噛み付いた口ばしを決して離そうとはしない。
振りほどくのは無理と判断したのか魔物は、今度は尾を横にではなく上へと持ち上げた。
凄まじい力を持つ尾は、自身と同程度の体重を持つと思われるコカトリスの身体を、容易く宙に浮き上がらせた。

だがコカトリスは空中にいながらも、重量挙げの選手のように全身の筋肉をキッチリと固め、地上にいたときの体勢を崩そうとしない。
魔物は止めを刺すため、釣り上げたコカトリスを〝もう一つの口〟がある自らの顔に近づけた。

魔物に接近した途端、今度はコカトリスが動き出した。
吊り下げられた状態のまま、首を下向きに一気に曲げ、鉄棒の大回転のように全身を持ち上げる。
魔物の尾先を支点として、身を逆上がりのように回転させたコカトリスの足が、天井にへばり付いている魔物に一挙に襲い掛かる。

ドガッ！

魔物は、空中から襲い掛かるコカトリスの、四本足による下段回し蹴りを、正面からまともに受けた。
その衝撃が元で、魔物の手足が天井から引き離され、コカトリスもろとも地面に墜落する。

「シャアア！」
「ギギィ！」

床に転がり落ちる二体の生物。先に起き上がったのはコカトリス

であった。

起き上がった直後に、何故かコカトリスは大きく息を吸い込んだ。
吸引機のように大量の空気がコカトリスの口の中に吸い込まれ、終わった途端コカトリスの腹が風船のように少し膨らむ。

「ギャギャァ！」

魔物が起き上がり、コカトリスに顔を向ける。その瞬間、コカトリスは吸い込んだ息を、魔物目掛けて一斉に吹きかけた。
吹きかけられた風は、ただの吐息ではなかった。コカトリスの口からは息と共に、霧状の黄色いものが大量に吐き出され、瞬く間に魔物の全身を包み込んだのだ。

この霧の正体は『パラライズブレス』、コカトリスの最強の武器である。
強烈な麻痺性の毒ガスで、これを吸い込んでしまった者はあっという間に神経が固められ、全身が石になったかのように硬直して身動き一つ取れなくなる。

勝利を確信したコカトリスは、止めを刺すべく口ばしを尖らせ、毒ガスに包まれている魔物目掛けて突進した。
とてつもない速さで、コカトリスの最先端が魔物に到達しようとした矢先、思いもかけない事態が起こった。
眼前の黄色い霧に包まれた空間から、何とあの魔物の尾が一直線に伸びてきて、コカトリスに襲い掛かったのだ。

「ジャァ!?」

尾の力と、コカトリスの突進の勢いが合わさり、尾先は簡単にコカトリスの腹を突き破り、背中を突き抜ける。ものの見事な串刺しで

あった。

霧が晴れると、そこには先程とはなんら変わることのない魔物の姿があった。身の動きに変調は一切無く、パラライズブレスは全く効いていない事がよく判る。

パラライズブレスを浴びた時、この魔物の口は開いていたはずだ。そうでなくてもこの距離から、あれだけ大量に浴びたのだ。肉体に何らかの影響が出ないはずがない。

この魔物は、コカトリスの毒に免疫があったというのだろうか？それともこの魔物の体質が、この世界の生き物とは根本から異なるということであろうか？

コカトリスは呻き声を上げながら、四本足をバタバタと動かす。魔物はコカトリスを貫いた状態のまま、尾を大きく振った。その勢いでコカトリスの腹から尾は引き抜かれ、コカトリスの身体は空中に投げ出された。

コカトリスは声一つ上げることなく、数メートル先の壁に激突し、地面の床に転がり落ちる。その後、コカトリスが動くことは二度と無かった。

「ピギャァァァァァァァァ！　ギャァァァァァァァ！」

倒れたコカトリスの姿を見届けた魔物は、研究所全体に届きそうな盛大な鳴き声で、長い勝利の雄叫びを上げた。

研究所のある場所の廊下を、シバ・トサ・幽霊少年が黙々と歩いていた。

目的地は勿論、この建物の出口である。だが三人はすでに、自分達が今研究所のどの辺りにいるのか判らなくなっていた。この研究所はとても巨大で、内部が非常に複雑になっている。　長く勤務している所員ですら、うっかり迷ってしまうこともあるぐらいである。
そのため急いでもしょうがないということで、三人は落ち着いた歩調で、当ても無く歩き回っていた。

「本当に平気なんですよね？　身体に何かおかしなところとかは？」

歩きながら鉄仮面の蓋を開けたトサが、本気で心配した様子で、既に三度目になる質問を幽霊少年にした。
幽霊少年は変わらず首を振って否定の返事をする。

「心配しすぎだっての。霊体に寄生虫とかが入るわけ無いじゃん」
「そんなの判らない！　あの魔物、どうみても普通じゃない！　いやそもそも魔道生物かどうかも疑問です！」
「まあ、そうだけどさ……」

シバとトサは、この研究所で二度、あの魔物に遭遇している。だが彼らには通常の魔物からは、必ず感じ取れるはずの魔力の波動を、何一つ読み取れなかった。
いくら気配を消したところで、一度でも魔法なり激しい運動をしたりすれば、この二人が気付かないはずがない。あの魔物には、魔力というものが根本から無いのであろうか？　しかしあれが一般的な、ただの動物とは思えない。

「魔道生物でないとしたら、あれは何だと思う？　馬鹿でかいだけの、ただのトカゲか？」
「知らないよ……。あと取り乱してごめん……」
「そう……。じゃあ話題を変えるとしますか」

シバは天井を見上げながら歩き、わざとらしく呆けた口調で言葉を紡いだ。

「もしここから無事脱出できたとして、あたしらそれからどうする？
訳が判らず逃げ帰ったという報告で基地に戻るか？」
「軍人やめる」

トサが何の迷いも無い表情で、あっさりと即答した。

「変なの。元々あんたが入りたいって言ったんじゃん？」
「ああ……。やっぱり俺には向いていなかったみたいです。それに戦争のこともあってもう潮時って気が……。シバはどうする？」
「トサがやめんなら、あたしもやめるぞ」
「そうですか……」

おおよその見当がついた返答だったようで、トサは呆れ顔で肩を落とした。

「別にいいじゃん。チビの頃からのよしみだ。あたしも付き合わせろ」
『フタリトモ、ナカガイインデスネ』

不意に後ろから聞こえた声に、二人は全く同時に歩を止めた。
先程の声。あの酷い風邪声にも似た、変てこな音調の声は、シバとトサの声では絶対にない。
二人はゆっくりと首を回し、背後にいる幽霊少年の方を向いた。
見ると当の幽霊少年も、かなり驚いている様子で、目をパチクリさせて口元に手をやっていた。

『アレ？　コエガ……？　……!!?』

声の主であった幽霊少年は、突如喉を押さえだし、苦悶の表情を向けてしゃがみ込んだ。声は出ていないのだが、この様子から見て呻いているように見える。

「お、おい⁉　大丈夫か⁉」

幽霊少年は右手で喉を押さえながらも、身振り手振りで「大丈夫」という意思表示をする。

やがて落ち着いたようで、幽霊少年は手を戻して立ち上がった。そして二人に向けてニコリと笑ってみせた。

これにはトサだけでなく、シバもさっきとは打って変わって不安げな表情を見せた。

「お前が喋れないのって……。ここの研究員共に身体をいじられたせいか？」

シバの問いに、幽霊少年は遠慮がちにも深く頷いた。シバの表情は憂いへと変化し、やがて不機嫌丸出しのものに変わっていく。

「何ていうか……。ここの連中がろくでなしなのは最初から判ってたけどさ。今ので更にムカつき度が上がってきたわ。この研究所、後で爆薬でも仕掛けてやろうか？」

「やめろっての……」

トサが額に手をやり、やれやれといった感じでシバの発言に忠告した。

三人は再び歩き出した。歩いてから僅か数分、分かれ道の一つを曲がったところで、その廊下の先にあるものを見つけた。

「人だ！」

あったのは仰向けに倒れた一人の研究員だった。三人は急ぎ足で、研究員に駆け寄る。だが研究員の顔を見たところで三人は絶句した。

「おいおい……、思いっきり張り付いてるよ……」

その研究員の顔面には、あの蜘蛛のような白い生物（おそらくあの魔物の幼体）が、お面のようにピッタリと張り付いていたのだ。

長い尾は首に巻きついて、ガッチリと締め上げている。研究員が動かないのを見て、もう窒息して死んでいるのではないかと危惧し、トサが肩に手をかける。

（わっ！）

手を触れた瞬間、研究員の身体が震え出す。そしてゾンビのようにガバッと起き上がり、顔についた生物を剥ぎ取った。

生物は実に簡単に顔から離れ、締め付けているように見えた尾も、たやすく首筋から解かれた。

生物はゴミ袋のように床にペチャリと落ちて、全く動きを見せない。どうやらもう死んでいるようだ。

「はぁ、はぁ、はぁっ……！」

研究員は喘息のように息を荒げ、眼前の三人を見やる。

シバとトサは、何かを思い出したかのように目を見開いた。シバは、訳が判らない様子の幽霊少年の肩を掴み、三人は視線を変えずに一斉に後ろに飛び退いた。

「うっ、うっ、うがあああああああっ!?」

途端研究員が腹を抑え、とてつもない悲鳴を上げて苦しみ出す。三

人は彼に近寄ろうともせず、眼前の光景を見入った。

（あ！　こいつさっき逃げ出した奴だ！）

シバがそれに気付いた瞬間、研究員の腹から何かが出た。

ブシャッ！ときつい音が聞こえ、研究員の血と腹部の肉片が飛び散り、腹の内側から飛び出したそれは、あの魔物であった。

身体はずっと小さく、白い体色であったが、その顔形は紛れもなくあの奇怪な魔物の姿をしていた。カンガルーの子供のように、研究員の腹から上半身を覗かせている。

「ピギィイイイ！」

小型の魔物は目の前の三人を威嚇し、コルク弾のように急に研究員の腹から飛び出し、三人に目掛けて飛んできた。

現したその全身に手足はなく、顔以外は蛇のような外観であった。

「火突！」

魔物が飛び出したと同時に、シバは既に構えていた剣を突き出し、魔物目掛けて火の矢を放った。

矢は空中で見事魔物に命中した。魔物の身体は、大量の火の粉を撒き散らして粉々になり、辺りに飛び散る。

事が一瞬で終わってしまった後、研究員は腹にポッカリと開いた穴を見せながら、口から血を吐き出し、再び倒れ付した。おそらくもう生きてはいないだろう……

シバは「ふうう！」と一息つくと、ゆっくり剣を鞘にしまう。幽霊少年は驚きと恐怖で表情が凍っている。

トサは研究員と魔物の焦げた破片を見やると、やや自嘲気味に呟いた。

「とりあえず、今はここから出ることだけを考えないと……」

第七話　火竜

研究所内部のある場所の廊下を、一匹の蜥蜴のような生き物が歩いていた。
それは例のごとく普通の蜥蜴ではなかった。

体重二トンはあるだろう巨体で、全身が真紅の鱗で覆われ、頭の角の後ろから尻尾の先までに、ビッシリと棘状の背ビレが生えている。
歩き方は通常の蜥蜴のように、腹と尻尾を地面に擦り付けて這う歩き方ではなかった。太く　屈強な四本の足が、自身の体重をしっかり抑え、全身を地面から持ち上げていた。
尻尾も地面を引き摺ってなどおらず、しっかり持ち上がっている。歩くたびにやや揺れてはいるもの、尻尾は剣のようにピンと直線状に後ろに伸びて、見事に身体のバランスを保っていた。

この蜥蜴の正体は『サラマンダー』。竜の一種で、この研究所に運び込まれた〝生きた研究物〟の中でも最高級の品物であった。
シバ達の手によって、魔法の檻の拘束から解かれたサラマンダーは、現在この研究所の中をあてもなく徘徊していた。
サラマンダーは、自分が今通行している長い廊下の向こうに、二体の動く物体を発見した。

「グガァァァァァァァァ！」

それが何なのかはっきり確認する前に、サラマンダーは対象に向けて激しい威嚇の鳴き声を上げる。
長い拘束で気が立っていたのか、動物の本能的な直感でそれが敵だと認識したのか定かではないが、相手もその挑発に答えたようで、同じ威嚇の声を向ける。

「「ピギャアアアアアアッ！」」

相手はあの魔物であった。やや広めの廊下の中を、二匹が並列して立ち、尾を風に揺れたススキのように上に立ててプラプラ動かしながら、サラマンダーに二度目の威嚇をする。

サラマンダーは突如首を縮め、口を財布のようにガッチリ閉ざす。そして鼻から大量の空気を吸い込んで、何やら身体に力を溜めているような動作をしてみせた。

その最中、魔物達が先に動いた。軍馬にも負けぬ速さで、サラマンダーに向けて突進する。

サラマンダーは敵が二十メートル先まで近づいてきた時、首を伸ばし、今まで固く閉ざしていた口を一気に開いた。

ズゴォオオオオオオオオオオオッ！

裂けそうなほど大きく開かれた口から出てきたのは、舌でも涎でもなく、溢れんばかりの業火だった。

口から放たれた巨大な火炎が、嵐のように前方の二匹の魔物に襲い掛かる。

「「ギャァア!?」」

驚いた魔物は即座に避けようとするが、あいにく逃げる場所がなかった。

竜族の中でも飛び抜けて強大な火力を持つサラマンダーの火炎息吹《ファイアブレス》は、魔物がいる廊下全体を丸ごと覆い尽くすほどの広範囲で、豪快に放たれたからだ。

サラマンダーのいる地点から、遥か向こうの横に下り階段がある廊下の最奥まで、長い廊下の三分の二の空間が、一瞬で灼熱の世界へと

変じた。
炎の嵐は、廊下の最奥の壁にまで激突した。
壁に掛けられていた窓のガラスは、一瞬で蒸発し、そこから炎が外に漏れ出す。だがそれは瞬き一つにも入らない僅かな時間の出来事で、炎の嵐に押し付けられた壁は、窓の穴を起点として一瞬で崩壊した。

巨大な研究所の外側。地上三階くらいの高さの壁の一点が、突如吹き飛んだ。そしてそこからとても熱く真っ赤なエネルギーの波が、ダムの決壊のようにありったけ流れ出る。
出てきたのはそれだけでは無かった。穴から溢れ出て、外部に噴水のように拡散していく炎の中から、二つの物体がポーン！と紙飛行機のように飛び出てきた。

物体は炎に包まれながら、綺麗な軌道を描き地面に墜落する。
外と言っても、やはり結界に覆われた空間の中なので雪は積もっていない。草一本生えていない茶色い地べたの上で、徐々に火が弱まっていき、その全体が見えるようになって来た。

それはあの魔物であった。といってそれは基本的な体型と、あの特徴的な頭部の形ゆえに判ったことである。常識的に考えれば、それはもうどこの誰だか判らないほど丸焦げになっていた。
全身真っ黒で、ほとんど炭になってしまった魔物は、二匹とも全く動かない。
氷漬けになっても見事復活して見せた魔物も、さすがにこれでは二度と起き上がることはないだろう。

「グゴォルルルル！」

サラマンダーは目の前に広がる、熱気に満ち溢れ、床も壁も天井も全て焼け焦げた廊下を一瞥すると、体を曲げてさっき通ってきた道に

戻ろうとする。
方向転換が完全に終了した途端、頭上から何かが降ってきた。
「グガ？」
それは最初天井に張り付いており、サラマンダーの顔が真下に到達した途端、いきなりそこを目掛けて落下したのだ。
それの正体は、あの魔物の幼体たる白い蜘蛛型の生物であった。
生物はサラマンダーの巨大な顔の目と目の間、眉間にピッタリとしがみ付いた。長い尾が下に伸び、顎の辺りに巻きつく。
大きさの違いのせいか、サラマンダーは特に苦しんでいる様子は無く。さして動揺も見られない。
サラマンダーは顔に付いたおかしな虫を振りほどこうと、頭を縦に横にと揺り動かした。だが一向に生物は離れない。
サラマンダーは頭を下げ、右前足を持ち上げた。
四本の指が生えたその大きな掌は、顔面を覆い、張り付いた生物を鷲づかみにする。その強靭な力で生物はベリベリと、いとも容易く剥がしとられた。
サラマンダーは掴み取った生物を、自分の鼻先へと持っていく。するとサラマンダーの二つの大きな鼻の穴から、二連の火炎が「フン！」と吹き上げられ、掴まれた生物を炎で包んだ。
烈火で焼かれた生物は、あっというまに黒くなり、ボロボロとサラマンダーの掌から崩れていく。
サラマンダーは姿勢を戻すと、元来た道に向けて歩き出した。
サラマンダーは気付いていなかった。それは既に自分の体内に入り込んでしまっていることに……。

中央研究室の入口前。何人ものウルフ隊の亡骸が横たわるその場所を、シバ・トサ・幽霊少年の三人は、ただの一言も口を動かさずに眺めていた。
彼らの心には悲しみはあったが、驚きは無かった。大分前から予想していた光景である。

不意に幽霊少年が、彼らの方に顔を向けながら目を閉じた。そして両手の掌を合わせ、腰を曲げて頭を下げる。
一般のウェイランド人ならば完全に意味不明のポーズであろうが、何故かシバとトサには意味が通じたようだ。二人は一度顔を見合わせると、続けて幽霊少年と同じ動きを取った。

しばらくして三人は顔を上げた。そして入口前に遺体以外にもう一つ存在している物体、表面の一部が溶けた謎の金属の箱に目をやった

「あれ何だと思う？」
「診療簿に書いてあった例の〝棺〟だろ？　中から凍った未確認生物が出てきたってやつ」

三人は開け放たれた箱の中身を覗き込んだ。冷却機能は既に停止しているようで、魔物達が見た、あの冷気は消え失せている。

「もぬけの殻か……。まあ当たり前だけどな」

現在内部には十の仕切りが組まれているだけで、もう何も入っていない。
棺から顔を離すと、いきなりシバが剣を抜き、目先にある中央研究室を睨みつけた。

「いるのか？」
「ああいる。ほんの微かな気配だったからよく判んないけど、多分相手は二匹。チビ助、お前は少し引いてろ」

トサも剣を構え、鉄仮面の蓋を閉めて素顔を隠す。幽霊少年は部屋側から見て、棺の裏に隠れこんだ。
シバとトサは、剣に魔力を込めながらゆっくりと歩み寄り、中央研究室に入っていった。だだっ広い部屋には、大量の奇奇怪怪な形をした大型の研究機材が、そこかしこに置かれていた。

（参った……。こんなに物があると、奴らが何処に隠れているか判らないぞ）

トサは何とか敵の気配を読み取ろうと、辺りを目配せしながら意識を集中し、五感を高める。
だが突如、その集中力を一瞬で吹き飛ばす轟音が部屋中に響いた。

「邪魔なのよ！　皆ぶっ壊れちまいな！」

トサの背後のすぐ側で、シバが部屋のあちこちに攻撃魔法を放っていた。
赤く光る刀身の切っ先から、強烈な火球が次々と発射され、部屋に置かれている機材を爆発・破壊していく。部屋中に爆炎が広がり、砕けた機材の欠片がシャワーのように一帯に降り注いでいった。

シバのとった予想外すぎる派手な行動に、トサはあんぐりと口を開け、呆然と今の光景を見ていた。
がむしゃらに思えるこのやり方は、意外と効果があった。巨大なカプセルのような機械に火球を放たれ、爆破四散したとき、機械の裏からあの魔物が飛び出したのだ。

「出たな！　覚悟しやがれ！」

シバは魔物に向かって走り出した。

接近戦を仕掛けるつもりかと思ったら、自身が魔物との間合に入る前に、シバは魔物目掛けて大きく剣を振った。

空振りの剣の軌道上に炎の線が出来上がる。それは大振りの炎の刃へと変化して、魔物目掛けて勢いよく飛んで行った。

魔物はこれに素早く反応し、全身を地面に張り付けて姿勢を急激に低くする。横斬りで飛ぶ炎の刃は、魔物の頭上擦れ擦れを通過していき、部屋の壁に衝突した。

火の粉が舞い、部屋の金属製の壁に、線状の焦げ痕が出来上がる。

「うりゃあ！」

シバは、今度は上から下へと、縦向きに剣を振り下ろした。すると剣の軌道通りに炎の刃が縦向きに魔物目掛けて飛ぶ。

魔物は横に走って、これをかわした。シバは諦めずに次々と炎の刃は放つ。

トサはシバに加勢すべきか、部屋内にもう一匹いるはずの魔物に注意を引くべきか迷った。

だがその迷いはすぐに打ち切られる。どこから跳び上がったのか判らないが、突然の目の前にあの魔物が、上から下へと着地して姿を現したからだ。そして勢いよくトサに突進した。

「うわ！」

トサは咄嗟に水の結界を張った。だが本当に咄嗟のことだったので、水の壁は薄く、魔物の体当たりに容易く打ち破られる。

（うぉおおおお！）

魔物の長い頭を顔面に受けて、トサの身体は後ろへと追いやられる。

やがてトサの背中は、部屋の壁に叩きつけられた。魔物はトサの両肩を手で掴み、更に後ろへと押し込む。あの細腕から信じられない力が発揮され、壁に押し付けられたトサを苦しめていく。掴まれているのが肩であるため、トサの両腕には力が入らない。

だがトサも負けじと、魔物の腹を右足で押し付けて引き剥がそうとする。

「トサ！」

魔法を撃ち続けていたシバは、これに気付くと即座にトサに駆け寄ろうとする。だがその時シバから逃げ回っていた魔物が、大口を開けて急に飛び掛ってきた。

「ぬお！」

跳んできた魔物の身体を、シバは紙一重で回避した。攻撃を避けられた魔物は、すぐに走り出してシバと距離を取り、再びシバに向き直った。

「ちくしょうが……」

この様子だと少しでも隙を見せたら、またこちらに襲い掛かってくるだろう。シバはトサの方に気を回すことができず。まさに一触即発の状態であった。

「ぬお！」

壁際に押さえつけられたトサに、魔物は口を開き、第二の口を飛び出させた。だがそれはトサの鉄仮面の額に到達する、僅かな距離の辺りまでしか届かない。
トサが右足で、魔物の腹を押しているため、魔物の顔は、今は何とか臨界点まで近づいていない。
不意に魔物は首を曲げた。

（へ？）

魔物の顔が横に移動し、後ろの部屋の風景がトサの視界に映る。だがその風景の中には、魔物の尾が伸びて、尾の先端がこちら目掛けて一直線に飛んでくる情景もあった。

（うわ！）

トサは直ぐに魔物とは別の方向に首を曲げた。槍のような尾が頭の直ぐ脇を通り、ガス！と鈍い音が耳に直で響いた。

「ギギャァァ！」

魔物の尾先は、部屋の金属の壁に深く突き刺さっていた。人体はおろか、特殊金属性の壁にまで突き通るとは、恐ろしい貫通力である。魔物は固い壁に喰いこんだ尾先を抜き取ろうと力を入れるが、中々抜けない。
その時、ドスリ！とまた何かが刺さる音が聞こえてきた。それと同時に魔物の身体が震え出す。

「あ!?」

音源に顔を向けると、そこには幽霊少年がいた。

表のウルフ隊の遺体からとったと思われる剣を、その低い身長から上向きに突き上げて、魔物の右の横腹を突き刺している。

幽霊少年の力は意外と強く、剣は魔物の肉体内部にかなり深く入り込んでいた。これに魔物は苦悶の声を上げている。

ただ下から刺されているため、突き刺した傷口から体液がドクドクと湧いてきて、剣筋を通って柄の方まで流れ落ちる。当然その柄を握り締めている幽霊少年の手に付着した。

トサは、痛手のせいか急に力が抜けてきた魔物の腕を掴み上げ、自分の肩から引き離す。そして一挙に魔物の腹を蹴り上げた。

その勢いで尾は壁から引き抜かれた。魔物は呻きながらトサから離れ、数歩引き下がる。だがすぐに体勢を立て直し、トサに向けて怒りの鳴き声を上げた。だがそれと全く同じ瞬間に、トサは魔物目掛けて、剣を突き出していた。

「水突！」

トサの放った刺突は、距離的な理由により、大きく放たれた魔物の口の直前で止まる。

もちろんそれで終わりではなかった。トサが突きを放った途端、水色の魔力で光る剣の切っ先から、強烈な水の矢が飛んだ。

その魔法の矢は、僅か数十センチ先の魔物の口内に見事飛び込む。水の矢は口内の〝第二の口〟を破壊し、その奥にまで突き抜けた。

パァン！と派手な音を立てて、魔物の後頭部が内側から破壊された。頭の表皮が、割れたお皿のように散乱する。

「おい！　お前！」

魔物が倒れるのを確認するより先に、トサは必死な形相で幽霊少年

に顔に向けた。
魔物を刺したときに使われた剣は、すでに跡形もなく溶けて消えていた。そしてその剣を溶解させた体液は、幽霊少年の両手にもベッチョリと付いている。

幽霊少年の手は……無事だった。

あの危険な体液は、ポタポタと滴となって下に垂れ落ちる。落ちた滴はそれぞれ豆粒のような範囲で、床を溶かしていくが、幽霊少年の半透明の手には何の変化もなかった。
幽霊少年は体液を取るため、手を床に擦り付ける。そのたびに金属製の床は、焼き魚のような小気味よい音を立てる。

トサはホッとして、胸を撫で下ろす。
考えてみればそうだ。霊体はこの世の物質ではない。だから酸による化学反応など起こるはずがないのだ。
幽霊少年の無事を見届けたトサは、即座にシバのいる側に顔を向けた。
もう一匹の魔物は、シバの周りを幾度も回りながら、何度も飛び掛り、シバを翻弄していた。魔物のあまりに俊敏な動きに、シバは攻撃を避けるのが精一杯で、中々反撃の機会を見つけられない。

（こんちくしょうが！）

シバはようやく炎の刃を放った。これを魔物は、横向きに跳躍して難なく回避してみせる。
跳びあがった魔物は部屋の壁に着地した。そしてイモリのように、凹凸の少ない金属板の側面にへばり付いてみせる。そしてその長い足で足元の壁を蹴りつけ、シバに飛び掛っていく。

シバはすぐにこれを避けようと身を翻す。だが魔物の身体が、シバ

のいる位置に到達する前に、魔物がシバの視点から見て左横に、盛大に吹き飛んだ。

（トサ!?）

吹き飛ばしたのはトサだった。向こう側から水の矢を放ち、シバに襲い掛かろうとしていた魔物に命中させてみたのだ。

空中で攻撃魔法を受けた魔物は、ダンスのように身体を何度も回転させながら飛んでいく。魔物は地面に降りてもなお向こうへと転がっていき、傷口から出た体液が斑点のようにして床を溶かす。

「行くぞ！」

「おう！」

トサはシバのすぐ側まで駆け寄ると、ようやく回転移動が停止した魔物に向けて、魔力を込めた剣を構えた。

「「はあ！」」

魔物が起き上がると共に、同時に放たれた水と炎の二本の刃が、一斉に魔物に襲い掛かる。

「ビギャァア！」

刃は魔物の胸と腹を同時に切り裂く。一つの傷は焼け爛れ、一つの傷からは大量の黄緑色の液体を噴出させる。

魔法の勢いで魔物は数歩下がったが、倒れはしなかった。ヨロヨロとぎこちない動きながらも何とか全身を支え、二人に再び威嚇の声を上げた。

「もう一発！」

二人は再度攻撃を放る。今度は水と炎の二つの矢が、魔物の身体を貫いた。
魔物の身体に、特色の異なる二つの穴が開く。この痛手にはさすがに堪えきれず、魔物は倒れ付した。

魔物は尾をバタつかせ、しばらく痙攣していた。だがやがて全く動かなくなった。
シバ達はしばらく様子を見たが、以前のようにいきなり起き上がってくることは遂に無かった。

「ふぇ～～～！」

シバは深い安堵の息を吐いた。
トサは無言で壁側に近寄り、壁に背中を這わせて座り込んだ。そして鉄仮面の蓋を再び取る。表情はシバと同じく疲れきったものだった。

「シバ、俺少し休む。なんだか肩が痛い……」
「そうか。そんじゃあたしも休むか。少し疲れたしな」

第八話　ドラゴン・エイリアン

シバはトサの所に寄り添い、トサのすぐ横で同じ姿勢で座り込んだ。それに続くように幽霊少年もシバの隣に腰掛ける。
右側にトサ、中央にシバ、左側に幽霊少年と、三人が一列に並び、電灯が大量に据え付けられた広い研究室の天井を見上げた。

さっきのシバの破壊活動が元で発生した火の手は、時間と共に消えていった。
三人はしばらく部屋のあちこちを、ボーと眺める。やがてシバが隣の肩の下にいる幽霊少年に呼びかけた。

「そういやお前。声は治ってきたか？」
『はい。だいぶ良くなって来ました』

あっさりと答えが返ってきた。先程の奇音声とは違う、突然の聞きなれない声にシバ・トサは僅かに驚く。
幽霊少年から発せられた声は、間違いなく人間の幼い子供の声だった。ただ生身の肉声とは少し異なり、電話越しに喋っているような残響が混じった声である。

「ああ……、うん！　治ったんだな、良かった」

少々戸惑いながらかけられたトサの言葉に、幽霊少年が満面の笑顔で頷く。

「お前カツゴロウだろ？　さっきも言ったけどお前のこと一度だけ見たことがあるよ」

幽霊少年＝カツゴロウが首を縦に動かす。この幽霊は、シバ達の故

郷・ヤマト地方では有名な存在だった。そこには霊感の無い人間にもはっきり見えるほどの、高レベルのマテリアルゴーストがいた。
そいつはその土地の至るところに出没した。現れる場所も、時間帯も一切関係なく、勝手気ままに彼は動き回っているのだ。
特に人に危害を加えることもなく、成仏を望むわけでもない。本人も自分がいつごろからこうしているのか、あまり覚えていないらしい。土地神の一種とも言われているが、定かなことは判らない。

『エルダーが制圧された時、ウェイランド兵がヤマトにも来たんです。それを見学しに行ったら、あの人たちとても驚かれて』
「そりゃあお前みたいな幽霊、他所じゃ見ないからな」
『はい、何だかよく判らないうちに、ここに連れてこらてしまいました』

これまでの寡黙ぶりが嘘のように、カツゴロウは、慣れた口こなしで淡々と喋り続ける。今度はトサが質問をしてきた。

「お前もあの魔法の檻に入れられたんだろ？　どうやって出れたんだ？」
『さっき保管室のドアを開けるとき、僕は非実体化してすり抜けましたよね？　あの技を使いました。あの檻の封印、幽霊には効き目が薄いみたいで、魔物騒ぎが起きたときにこっそり脱出したんです。色々な実験で魔力をかなり消耗していたんですけど、このときはそれが逆に好都合でした。あれって力が弱い幽霊が得意なものですから』
「檻から出た後、この研究所自体からはどうやって抜け出す気だったんだ？」
『全然考えてなかった。この建物、全部変な壁に囲まれてて、シバさん達が来てくれて本当に助かりました』

シバとトサは呆れ顔で息を落とした。確かに現在、結界の一角には穴が開けられていて、今なら脱出も可能だろう。

「そんじゃあ次の質問。あの魔物のことで何か知らないか？」

シバが期待感ゼロといった感じで問いかける。ただの脱走犯なら、あの何だかよく判らない生き物のことなど知る由も無いだろう。だがカツゴロウの返答は意外なものだった。

『ええ、知っています。昔あれと同じのを見たことがありますから』

「へ？」

『あれは異界の魔物ですよ』

二人の顔つきが変わる。

「異界の魔者てのはあれか？　アマミヤ様がよく言っていたやつか？」

『はい。エルダーとの国境の地下遺跡のことは知ってますか？』

「ああ、よく知ってるよ」

シバは含みをいれるような口調で言葉を返す。

カツゴロウが言っているのは、つい最近ウェイランド王国が侵略戦争に利用した、あの遺跡のことだ。

ウェイランド王国の南方には、エルダー王国という国がある。

二つの国の国境は、西から東へ一直線に続く、とてつもなく巨大な山脈で綺麗に区切られている。この山脈が壁になっているせいで、ウェイランドとエルダーは隣国にも関わらず、何十年も交流を持たずにいた。

その山脈のある場所に、一つの遺跡があった。

それは巨大な山の斜面に、啄木鳥の巣のようにポッカリと開けられた、巨大な洞穴だった。

どうも天然の洞穴ではないらしく、壁や地面は全面がキッチリと石材で固められ、内部には穴を支える巨大な柱が定位置的に建てられている。

元からあった洞窟が改造されたものなのか、最初から人に掘られた人口穴なのかは不明であるが、とにかく人の手がなされているものに間違いはなかった。

それは高さ・幅が数十メートルはある恐ろしく巨大な洞穴だった。だがその奥は巨大な壁で行き止まりになっていた。

だがつい最近その壁が消えて、奥に進めるようになっていた。何故このようなことが起こったのか判らない。内部では壁が壊されたような痕跡も破片も一切見つからなかった。

その奥もとてつもなく深かった。いや深いというか、この洞穴は大山の内部を貫通していて、向こう側のエルダー領にまで届いていたのだ。

この遺跡の存在を知ったウェイランド王国国王のユタニ・ウェイランドは、即座にこれを自国の領土拡大に利用すると声明した。

そしてまだ充分な調査が進んでいない、この得体の知れない洞穴に、愚かにもウェイランドは大軍を送り込んだのだ。

七千を超える大部隊がこの洞穴を潜り抜け、向こう側に存在する土地、エルダー王国に戦争を仕掛けた。そして見事に敗北し、現在のこの国の混乱の元を生み出してしまった。

本題はこの遺跡の調査報告。実はこの洞窟の壁の一部には古い文字で、この遺跡の由来が書かれていた。その内容によれば、この遺跡は〝異世界〟の狩人が造ったというのだ。

狩人たちがこの洞穴の中に、自分達と同じ異世界の魔物を放ち、それを自分達の狩りの標的として死闘を繰り広げた、という内容である。

カツゴロウが口にした〝異界の魔物〟というのは、名前の通り異世界からきた怪物のことである。
エルダー王国ではそれなりに知られた存在で、今はいないが過去には確かに存在していた者とされている。
だがここウェイランドでは、名前すら全く知られていない存在であった。別の次元にある別の世界の存在すら、ウェイランドではただの御伽話の類に入れられている。

ただ先程説明したエルダーとの戦争に、例の異世界の狩人が現れたという噂が流れていた。
初戦に見たこともない魔法攻撃で竜騎兵団が壊滅した、多数のウェイランド兵が皮を剥がされて宙吊りにされていた等、多くの奇怪な報告が実際に本部に出されている。
そのためか、最近になってそれを信じるものがウェイランド内にも現れてきている。

「さっきお前あの怪物を見たことがあると言ってたな？」
『はい。あの酸の血の竜を、アマミヤのご先祖様が戦っているのを、遠くから見学していました。いつごろからかはよく覚えていませんが、多分数百年は前の話かと』
「マジかよ。あの胡散臭い話は本当だったのか……」

二人はある意味で驚愕した。ヤマト地方の領主＝アマミヤ家では、酸の血を持つ異界の竜を倒したという話が残っている。その真偽を確かめる術は無かったが、今ここにその生き証人（生きてはいないが）が現れたのだ。

『次は僕から質問してもいいですか？』
「いいぞ」
『お二人はさっき、ヤマトの生まれだと言いましたよね？　どうして

ウェイランドにいるんです？』

真っ当な質問だった。ヤマトのあるエルダー王国と、ここウェイランド王国は、国境を山脈で塞がれているため、ほとんど国交がない。そしてつい最近、両国は明確に敵対国になった。

だがその中で、エルダー人がウェイランドの軍にいるのだ。確かに不思議な話だ。

「大した理由じゃない。あたしらは誰も知らないっていう、向こうの国を見たくて、あの山脈を超えたんだ。あの時は戦争が起こるなんて誰も思っていなかったからな。外国人が職に就くのに何の問題も起こらなかったぞ」

『超えたって……ジャイアントダックでですか？』

「いや足で行った」

シバの返答に、カツゴロウは少し戸惑った。

『あの山は、人の足では絶対に通れないって聞きましたけど……』

「ううん。やばかったら引き返すつもりだったけど、意外と通れるもんだったぞ」

「でも俺は死にかけたんだけどな……半ば強引に連れられてあんな目に。すぐ引き返すと思ってたのに……」

トサがシバに向けて、何やら責めるような目線で口を開く。

カツゴロウは、あの魔物を撃退した二人の強さの理由が何となく判った。

「そんなことよりさ。カツゴロウはこれからどうするんだ？」

『え？』

思いがけない問いに、カツゴロウは目を丸くする。

「ここから出られたら、あたしらは軍人辞めるつもりだ。ていうか逃げる。戦争のせいであたしらかなり立場が悪くなったし、そのうえ部隊壊滅・任務放棄であたしらだけ帰ってきたら、どんな処分が降りるか判んないからな。お前のほうは、脱出後どうするんだ」
『ええと、ヤマトに帰ります……』
「どうやって？」
『歩いて……』

マテリアルゴーストという存在は、誰にもその姿が見えて、物に触れることができることから、死霊の中では最上級の部類に入れられる。ただし普通の霊と違って、宙に浮けない。
世には〝魂は千里を走る〟という言葉がある。だがカツゴロウの場合は、移動の際は人間と同じように歩いて向かわなければならなくなる。

「じゃあ、俺たちと一緒に行きません？」
『え？』
「一人でこの山下りるのはつらいでしょう？俺たちも逃げるはヤマトしかないわけだし、ちょうどいいじゃん」
『あ、ありがとうございます』

トサの言葉に、カツゴロウは感謝の意で深く頭を下げた。

「まあそれは全部、このダサい研究所から出れたらだな。とりあえず今は疲れをとっておこう。カツゴロウ、お前体力はまだあるか？」
『ええ充分です』
「じゃあこの部屋の周りを見回ってくれない？　あの〝非実体化〟てやつで」
『了解です』

カツゴロウの身体の透明度が上がり、意気揚々と金属の壁をすり抜けて消えていった。
残った二人は体力温存の意味をとって、それ以上の会話を行わなかった。

「起きろーー！」
「ぶぼ!?」

顔面に強烈な痛みを伴ってトサは目覚めた。視界には拳を握り締めて自分の前に立っているシバと、何やらオロオロしているカツゴロウの姿が映った。

「ああ、おはよう。シバに起こされるなんて何年ぶりだろうな」
「さあ、忘れたな。しかし寝起きの一声がそれとはな。殴られて怒らないのか？」
「ん？　ああ、そういえばそうだな。お前もっとマシな起こし方にしろよ……」

そんな呑気な会話を、カツゴロウがシバの腰を叩いて打ち切る。
『そんな話はいいです！　大変です！　何かすごいのがこの部屋に近づいてますよ！』

焦りながらこの部屋から出ることを促すが、シバはカツゴロウの言動に変なものを感じ、首を捻る。
「〝すごい〟って何だ？　あの長頭（ながあたま）の魔物じゃないの？」
『……そうだと思います。何か変わってますけど』

「変わってる？」
『はい、それが……』

ズドォオオオオオオオオオオン！

カツゴロウが口を動かす最中、耳がいかれそうなほどの爆音と、眩しい赤い光が部屋中を駆け巡った。

「何だぁ!?」

当然のごとくこれに驚いた三人は、その音源・光源に顔を向ける。見ると地上より数メートルの位置の、研究室の壁の一部が、激しい爆発により吹き飛んでいた。正確には壁ではなく、壁の沿った上がり階段の末にある、この研究室の別口の大扉が破壊されているのである。

火を纏った大量の金属の欠片が、部屋中に雨霰と降り注ぐ。シバとトサはそれらが目に当たらないよう、手で顔を押さえながらその先を見詰めた。

そこには入道雲のように黒い煙が立ち込めている。その扉があった場所に、大きな影が薄っすらと映った。

やがて煙が晴れると、その実体がはっきりと三人の目に表れた。

「あれは……魔物か？」
「まあ、そうなんだろうけど……。新種かな？」

シバ達が困惑している最中、それは上階にある扉の穴から蛙のように飛び跳ねて、中央研究室の内部に舞い降りる。

ドスン！という重量感あふれる足音が響いた。

その生物は、この研究所に突如出没し、今までシバ達が戦ってきた

奇怪な魔物達と酷似した姿をしていた。だがあらゆる面で、これまでの魔物とは異なる特徴があった。

まず足。これまでの魔物は前足より後ろ足のほうが長く、身体をやや前屈みにした二足歩行をしていた。

だがこの魔物は四足歩行だった。足は四本とも同じぐらいの長さで、蜥蜴や鰐に近い立ち方をしている。ただし通常の蜥蜴のように、腹部を地面に擦り付けておらず、哺乳類の四足動物のようにスクッと全身を地面から持ち上げていた。

またこれまでの魔物は全身が濃い青色で統一されていたが、この個体は微妙に赤みがかかった体色をしている。

後頭部はやや短めで、頭上を覆っているツルツルした皮が張った部分の真ん中に、突き刺すような鋭い角が一本生えていた。その角は鮫のヒレのように後ろに曲がっており、見ようによっては竜の角に似てなくもない。

そして何より目を見張るのは身体の大きさ。四足歩行なので身長は比較できないが、体長は通常の魔物の倍近くはあるだろう。

また通常の個体は、全身がスラリとした細身の体型をしていたが、ここにいる個体はややずんぐりした熊のような体躯をしていた。

「ピギャァァァァァァァァ！」

魔物は通常体とさほど変わらない音質の鳴き声を、シバ達に向かって上げた。

河馬のように大きく開け放たれた口の内部からは、きちんと第二の口が見える。ただその口は通常体の口と比べると、体格の対比的に見てもかなり大きく、しかも形も大分変わっていた。

その口の中の口は、爬虫類の口のように横に大きく裂けており、第

一の口と同じようにシバ達に向かって大口全開にしている。まるで魔物の腹の底から、鰐のような別の生き物が這い出てきているようだ。
そしてその第二の口の奥からは、何故か赤い光が放射されており、回りの空気が蜃気楼のように少し歪んでいた。
シバとトサはそこから今までの魔物からは感じられなかった力、〝魔力〟を感知した。

（やば！）

シバは即座に足元にいたカツゴロウを掴み上げ、トサと一緒に右横に飛び跳ねて転がりこんだ。

ズゴォオオオオオオオオオオッ！

シバ達が動いた瞬間、魔物の口の奥、すなわち第二の口の中から、溢れんばかりの業火が嵐のように豪快に放たれた。
広範囲に放たれた炎は、先程シバ達が立っていた場所を包み込み、さらに奥へと飛んで行く。

「アヂ！　アヂ！」
炎はギリギリでかわしたものの、二人は熱風に晒されただけで大きく怯む。シバが得意とする火の魔法とは、比べ物にならない熱量である。
そんな中、不意に炎が飛んでいった先に目がいった。

「ぬぉおお!?」

炎は向こうの壁に直撃し、すでに拡散して消えていた。
後に残った壁は、何故かさっきとは色が変化していた。頑強で綺麗に光を反射していた金属の壁は、現在薄い煙を沸き昇らせながら、部

分的に赤く発光している。シバは、それは壁が熱で融解しているのだと、すぐに理解した。

「逃げるぞ！」

トサの口からそういう声が出始めた時には、既に三人は地上の入口の方へと身を翻していた。鼠のように素早く逃げ走り、開けられていた巨大な扉の向こうへと飛び出していく。

炎の魔物もそれを追っていった。大柄な図体の割にとても軽やかな動きで、外の廊下へと顔を出した。そして大口を開けて、再びあの業火を吐き出した。

廊下の奥でこちらから背を向けて走っている三人に、再び発生した炎の嵐が襲い掛かっていく。だが突然、曲がり角のない直線状の廊下を走っていた三人が、右横へ方向転換し、そして消えた。

そこには曲がり角も、別部屋の扉もなかった。ただそこの壁石が盛大に破壊されおり、大きな穴が堂々と出来上がっていた。

先刻、ガーゴイルにぶち抜かれた跡である。三人はそこを通り抜けたのであった。

（飯屋？）

壁の向こうは食堂室であった。木造の椅子やテーブルと共に、何人もの所員達の亡骸が倒れ、血が滴っている。もうこの部屋で、食事を取る気になれる人間はいないだろう。

出入り口の扉には、大量の椅子や重い小麦粉の袋などが積み重ねられており、外側から誰も入れないよう、ガッチリと塞がれていた。

また天井の一点には、上階から破られたと思われる、丁度あの魔物が通り抜け出来そうな大きさの穴が存在していた。真下には石の欠片がいくつも積み重なっている。

おそらくここに倒れている所員達は、ドアを塞いでこの部屋に立て篭もっていたようだ。
確かに特殊金属で出来た扉を破壊するのは、さすがに魔物でも容易ではないだろう。だが予想外にも上から侵入されて、この有様ということか……。

そんな部屋の様相を全て理解する前に、たった今シバ達が通ってきた穴の方から、暑苦しい炎の光が放てられた。
幸い川の支流のように、炎がこの部屋に侵入してくることはなかった。三人は慌てて部屋の脱出口を探す。

それはすぐに見つかった。調理場のある場所のすぐ近くの壁に、今シバが通ってきた物と同じぐらいの大きな穴が出来上がっていた。
何らかの強い力で砕かれた跡のようで、粉々になった壁石が食堂室側に飛び散っている。そこからもう一つの穴のほうまでに、大きな足跡と思われる陥没部分が床石に出来ていた。
言わずもがな、ガーゴイルがこの部屋を通過した跡である。

三人は迷わずその穴を潜り抜ける。穴の向こうには、上の階へと続く折り返し階段があった。

「昇るぞ！」
『はい！』

第九話　亡骸

三人は懸命に階段を駆け上がった。三階辺りまで昇り、特に目処はなく廊下を駆け巡った。そして適当な部屋を選び、その中へと飛び込んで扉を閉めた。

「はあ、はあ……。鏡？　化粧室か？」

「いや、違うかと……」

その部屋は通信室だった。部屋の中には大きな魔法の鏡『双面千里鏡』がいくつも置かれている。

何故かシバ達の足元の扉の前には、何故か椅子や机が散らかされており、天井にはさっき食堂室にあったものとよく似た穴が、ポッカリと開いていた。

そして壁際の床には一人の研究員が、扉の前のシバ達の目の前の床には、一人の甲冑を纏った兵士が、両者とも血塗れになって倒れている。

二人は気づかなかったが、これは最後に王都に緊急事態の報告が行われた部屋だった。

シバ達は息を切らせながら、部屋中の楕円形の大鏡を見据えた。トサがそれらを指差し、シバに顔を向ける。

「どうする？　ビショップに連絡するか？」

「……やめておこう」

「そうだな……」

二人は倒れるようにして、その場に座り込んだ。

「いったい何なわけ、あいつは……？　火吹いたよわ、火を」
「さっぱりです。何か魔力まで感じられたし。だからってあの魔物と無関係ではなさそうですが……」

いままでシバ達が遭遇した魔物からは、魔力という霊的な力が一切感じ取れなかった。
だが何故かあの炎の魔物にはそれがあった。ファイアブレスまで吐いて見せたのだから、感覚の誤認であるはずかない。

『僕がまた様子を見てきましょうか？』

隣から話しかけてきたカツゴロウに、シバが怪訝な表情で目をやった。

「まあ、そうしてくれるとありがたいが……。よく考えてみれば、お前まで一緒に逃げる必要ないんじゃないのか？　壁抜けが出来るんだし」
『でも、あの結界の抜け方が判りません』
「ああ、そうだったわね」

シバがうっかりしたと漏らす。

「この研究所の正面側に行けばいい。そこの結界に判りやすく穴が開いているから、すぐに見つけられるわ。外にアイスワイバーンを停めている所があるから、お前は一足先にそこで待ってて」
『そうですか……』
「いつまでたっても来ないようだったら、お前だけ逃げろ。お前、竜の乗り方は判るか？」
『いえ全然。カルガモなら乗れますけど……』
「そうか。まあとにかくお前は行け。途中であの化け物に見つかるドジは踏むなよ」

カツゴロウはすぐには答えなかった。目線を上げて、何やら考え込むような動作をしてみせる。シバが「どうした？」と問いかけると、カツゴロウはあっさりした口調で自分の決意を話した。

『僕、まだシバさん達と一緒に行きます』

「はあ？　何で？」

『ここから出るお手伝いがしたいからです。大丈夫ですよ。僕は幽霊だから、そう簡単にあの世には送られません』

「はあ……まあ確かにそうだが……」

何故か自信たっぷりのカツゴロウに、シバは呆れたような困惑したような微妙な面持ちで頷いた。

カツゴロウは最初に言ったとおり、非実体化して周囲の偵察に向かおうとしたが、トサが制止する。

「よせ。あいつ相手に偵察はいらないよ。今は全員一緒にいたほうがいい」

「そうか？　ああ、確かにそうだな」

『そうなんですか？』

カツゴロウは意味がよく判らず、頭に疑問符を浮かべる。

これまでの魔物は、気配を消すのが驚くほど上手く、魔力も無いため一度隠れられるとその存在を見つけることが非常に困難だった。だが炎の魔物にはしっかり魔力が存在し、気配の消去もさほど上手くないようだった。

あれほど強い魔力を有しているのだ。炎の魔物が近くに迫れば、即座に存在を感じ取り、襲われる前に上手く逃げ出せる自信は充分にある。

身のこなしも、通常体の魔物のおぞましい敏捷性と比べればかなり

鈍重だ。力比べではどうあがいても勝つことは不可能であるが、速さ比べならば充分勝算があるだろう。

「とりあえず出口探しを再開するぞ。出入り口でなくとも窓でもいい。外側の壁にさえ見つけられれば、そこをぶち破って脱出するまでだ」

二人は神経を研ぎ澄まし、炎の魔物が近くにいないか丹念に確認する。近辺にそれらしき生命体がいないことを確認すると、三人は扉を開け、出口探しに再出発した。

三人を見失った炎の魔物は、研究所内をどこへともなく彷徨っていた。

尾で壁を叩きつけると、あっさりと石材は砕け、どこぞの部屋に続く穴が出来る。炎の魔物はその穴に首を突っ込むが、中に入ることはなく首を戻し、元の廊下を歩いていった。

炎の魔物はこういうことを何度か繰り返していた。あの三人を追っているのか、それとも出口を探しているのかは不明である。

ある時、炎の魔物は何かに気付き、足を止めた。

そこにいたのは一匹の通常体の魔物だった。炎の魔物と対比すると、随分小柄に見えるその個体は、廊下の曲がり角からそっと炎の魔物を観察していた。

最初は警戒していた魔物だが、やがて曲がり角から出て、正面から炎の魔物に対峙する。それに気がついた炎の魔物が足を止めて一声を発した。

「ギシャァアアアア！」
「ピギィイイイイ！」

お互い顔を向かい合わせながら、鳴き声を上げ交わす。傍から見ると威嚇しあっているようにも見えるが、双方が襲い掛かってくる様子は無い。見ようによっては、何らかの意思疎通を行っているようにも受け取れる。

やがて魔物達は鳴き合いをやめ、魔物は踵を返してどこかに走り去っていった。

炎の魔物は、顔先から数メートル先の天井を見上げ、大口を開けた。

「あれは何だ？」
「サラマンダーだろ？」

出口を探していた二人は、実に派手な様相で破壊された廊下の壁を発見した。先程逃走に使ったガーゴイルの通り抜け跡よりも、ずっと大きい穴である。何気なしに中を見やると、少々反応に困るものがあった。

その部屋は大寝室のようであった。

現在そこはひどく荒れ果てていた。それなりに広い部屋の中、大量の二段ベッドが砕かれ、バラバラになって転がっている。形が無事に残っているのは、ほんの数台である。

そんな部屋の中に、大きな生き物が一頭倒れている。あの奇怪な魔物ではない。少し前にシバ達が保管室でも見たサラマンダーであった。

滑稽なことに、サラマンダーの頭は壁に埋まっていた。結構な勢い

で突っ込んだようで、頭から首筋にかけて壁石の中に深くめり込んでいる。
恐らく向こう側の部屋、もしくは廊下には、サラマンダーの頭が壁から生えている奇妙な光景を拝見できるだろう。
サラマンダーはそんな状態で、横ばいで倒れている。シバ達の視線から、赤い背中を見せて全く動かない。
「死んでんのかな？」
シバは壁の穴と部屋の様子を見て、サラマンダーは病気か発作かで呻き苦み、その拍子に壁に顔面を激突させてしまったのでは？と推察した。
とりあえず生死だけでも確認しようと、シバはゆっくりとサラマンダーに近づいていった。
ただ気絶しているだけだった場合、人の気配が近づいた拍子に、いきなり目を覚まして暴れ出す可能性もある。突然の攻撃に備えるため、シバは鞘にしまわれた剣の柄を強く握り締めた。
シバが動き出すと、トサもそれに習って動いた。近づいてみると、何故か向こう側から血の匂いがしてきた。
「起きてますか～～？」
コン、コン
シバが試しにサラマンダーの背中を軽く蹴る。だが何の反応も無い。
「……」
それを見るとシバは、いきなりサラマンダーの身体に乗り上げた。

天井を見上げる大きな横腹に子供のように座り込み、死角になっていた腹側の裏の風景を見る。

「うわ！」

シバは軽く驚いた。サラマンダーの身体の裏側から、転がったコップの水のように、大量の血が床に付着していたのだ。

裏側に降りて、サラマンダーの腹部に目をやると、見事に大きな穴が開いていた。血はここから噴き出した物のようだ。

その穴は、外部から貫かれて出来たものではないようだった。分厚い表皮が蜜柑の皮のように破られ、肋骨がそれと同じく外側にへし折れている。まるで内側から何かが飛び出したかのようだ。

尻尾の方を遠回りして、回り込んできたトサ・カツゴロウも、これを見て絶句した。

「これって……あれよね……？」

「ああ、俺も同じこと考えた……」

三人はあの病室で見たものを思い出し、顔を青くする。

考えうる一番可能性の高いものは、このサラマンダーもあの白い蜘蛛に寄生されたということだ。だとするとあの炎の魔物はもしかして……。

「気が変わった。通信室に戻ろう。最終的に脱走するにしても、とりあえずあの化け物のことだけでも報告しておいたほうがいい」

トサの提案に、二人は無言で頷いた。

ウルフ隊の連絡がいつまでたっても来なければ、ビショップはまた新たな調査部隊を派遣してくる可能性は高い。

あの炎の魔物はとてつもなく強い。目撃したのはほんの僅かな時

間だけだが、あれだけでも充分すぎるほどそれは判った。
そして新たな調査隊がこの研究所で発見するのは、当然あの炎の魔物である。そうなるとまたウルフ隊のような惨劇が起こるかもしれない。
あれはバジリスクのような普通の魔物とは、一味も二味も違うのだ。これからアイスワイバーンを盗んで逃亡する予定の身ではあるが、あの危険な存在を伝えておくぐらいの義務はあるだろう。
三人は急ぎ足で通信室に引き返していった。

「ちょっと待て！」

通信室の扉のすぐ前に来て、シバが叫んだ。二人は言葉通りに足を止める。

「どうしました？」
「何つうかさ……。嫌〜〜な予感がするのよね」

シバは閉じられた扉をジィと見詰める。特殊金属製の扉はきっちりと閉じられていた。
さっきここを出たとき、扉をこういう風に、きちんと閉めていったかどうかはよく覚えていない。シバは、この扉に違和感を感じ取っていた。
よく観察して見ると、取っ手の部分に、透明な粘液のようなものが僅かに付着していることに気がついた。

「カツゴロウ。悪いけど、中を調べてくれない？」
『え？　ああ、はい……』

カツゴロウは不思議そうにしながらも非実体化を行い、通信室に歩いていく。極限にまで透明になったカツゴロウの身体が、通信室の金属の扉をすり抜けて消えていった。

通信室の中は、さっき入った時と、あまり変わらない様相であった。千里鏡を載せたいくつもの鏡台と、二人の人間の遺体、そして天井に開けられた穴……。

『(あ!?)』

穴を見ようと上に顔を向けた時にようやく気がついた。あの穴のすぐ隣に、魔物が虫のように天井にしがみ付いていたのだ。

魔物は石像のように、気配を欠片も出さずに制止していた。だがカツゴロウがその姿を目撃すると、瞬く間に制止を解いた。

長い尾が一気に振り下ろされ、先端の刃が振り子のようにカツゴロウに襲い掛かる。

『……!』

金属壁にさえ穴を開ける鋭い尾先が、あっというまにカツゴロウの身体を串刺しに……はしなかった。

「グギャア!?」

尾は空を切るように、カツゴロウの身体を通り抜け、勢いをつけすぎたブランコのように天井に激突しそうになる。

魔物は一瞬動揺したが、すぐに姿勢を変えた。天井を蹴りつけて、下方にいるカツゴロウに勢いよく飛び掛る。

激突と同時に押さえつけようとしたらしく、両手の掌をカツゴロウに突き出し掴み上げようとする。
だがそれも空振りになった。手はまたもやカツゴロウの身体をすり抜け、拍手をしたかのように、掌同士を叩いてしまう。そしてそのまま間抜けな格好で、顔面を床に激突させた。

床石に前頭部をめり込ませ、逆立ち状態になった魔物の身体に、透明なカツゴロウの身体が重なり合っていた。いや、見た目からして、めり込んでいたといった感じである。
カツゴロウは平然とした顔で、重なっていた魔物の身体から離れた。

「カツゴロウ！」

扉が強く開けられ、部屋にシバが飛び込んできた。
魔物はすぐに起き上がり、シバに攻撃態勢をとろうとする。だがそれよりシバの方が速かった。
剣を鞘に収めたまま間合に突撃する。魔物は尾を使ってシバを払おうとするが、それがシバに近づいた瞬間に、シバは一気に鞘から剣を引き抜いた。

ザシュ！

居合い一閃。
抜刀の勢いで加速した太刀筋は、強烈な火炎を纏って魔物の尾を切断した。尾の後方の細長い部分が焼き切られ、魔物の最大の武器である槍のような尾先が床下に落ちる。

魔物は痛みで悶絶しながらも、シバに向けて口を開き、威嚇しようとする。その途端、シバは魔物に向けて刺突を放った。

火の魔力で赤く発光した刀身が、魔物の口内を貫く。肉が柔らかく引き裂かれる音が聞こえ、刀身全体が内部を突き抜けて後頭部に刃先が飛び出した。見事な頭部串刺しである。

刀身に宿った高熱が、魔物の頭を内部から焼き、口と後頭部の傷口からは炎が噴出花火のように放出される。魔物は川に溺れたかのように、手足をバタバタ振るわせたが、やがて動かなくなった。

シバが剣を引き抜くと、魔物は煙と焼け焦げた匂いを発散しながら、パッタリと倒れた。

「無事かお前？」

『はい、大丈夫です。元から死んでますから』

シバとカツゴロウは、倒れた魔物を見下ろした。

『この怪物……、僕達が通信室に戻っているのに気付いて、待ち伏せてたんでしょうか？』

「さあな……」

シバは、今度は天井の穴を見上げる。

（あの穴からこの部屋に入ったのか？　しかし上の階から、あたしらの気配が判るとは思えんし……。まさかこの階で扉を開け閉めして入ったなんて事は……）

そんな高知能な生物には見えない。そう考えた矢先……

「うわ！　またかよ!?」

突如、建物が細かく揺れ、どこからか凄まじい爆音が聞こえてきた。

今までにも開放した珍獣達の行動で、度々変な音が聞こえていたが、今はそれも大分収まってきていた。その矢先のいきなりの爆音で

ある。
驚いたシバの耳には、音は階下の方から聞こえてきた気がした。
「何だ！」
そう言った途端、二度目の爆音が発せられた。今度はさっきよりも大きい。もしかしたらこの階内で発生した音かもしれない。
「まさか！　天井をぶち抜いているのか!?」
いつのまにか側にいたトサが叫んだ。
「ええ、そうみたいね！」
この爆音の正体は二人にはもう判っていた。
二人は爆音と揺れと同時に、この階層のどこかから強い魔力を感じ取った。つまり今の音と揺れは、魔法によって何かを破壊した事によって発生されたものだ。
そして今この研究所内で、あれだけの魔力を持つ者はただ一頭のみ……。
「逃げっぞ！　外か、もっと上の階だ！」
もう通信などしている暇はない。シバ達は出口、もしくは上階に登れる階段を探そうと駆け出す。今の魔力で、魔物が入り込もうとしている穴がどのあたりにあるのか、だいたいは頭に入っている。
だからこそ逃げなくてはならない。炎の魔物は魔力を持っていた。だとしたら奴もまた魔力を感知する能力を持っていてもおかしくない。さっきの魔物との戦闘で使った魔法が元で、自分達の位置が知られてしまったのかもしれない。

『待ってください！　僕があいつを引き付けます！』

既に部屋から抜け出ようとしていた二人は、カツゴロウの言葉に同時に振り返った。

見るとカツゴロウが、何のつもりか先程シバが斬りおとした魔物の尾を、両手で縄跳びを持ち歩くように掴んでいた。

「引き付けるって、お前……」

『さっきの魔力は僕にも読めました！　僕があいつを何とか下の階に留めさせますから、シバさん達は早く出口を！』

そういってカツゴロウは、尾を抱えたまま、シバ達を押しのけて部屋から出る。そして爆音と魔力が放たれたと思われる方向に続く廊下を走り去っていた。

制止の言葉をかける隙も無く去っていったカツゴロウに、シバはどう言葉を放てばいいのか判らず当惑している。

「カツゴロウ……意外とかっこいいですね」

尾を玩具のようにブンブン振って走るカツゴロウの背中を見て、トサは少し感動していた。

第十話　地獄の犬

炎の魔物は、天井の壁を二つ分破壊していた。
口内から小ぶりの火球が飛び、それが天井に衝突した途端爆発する。天井が砕け、大量の石が飛び散り、あるいは土砂のようにガラガラと雪崩れて、床を埋めていった。

舞い上がった埃が晴れて、二階の天井が見えてくると、炎の魔物は再び手加減しているらしい威力の火球を撃ち、さっきと同じように破壊する。

「ギャア、シィイイイ！」

三階の天井が見えると、炎の魔物は積み重なった瓦礫を踏み、二階に上ろうとする。
少し上体を起こし、一時的に後ろ足だけで立ち上がる状態になると、前足を二階の床に乗り上げさせる。すると今度は上半身を支点にして、後ろ足を持ち上げて二階へとよじ登っていった。

完全に二階に上がると、炎の魔物は三階へと続く穴を見上げた。炎の魔物は火球を真上ではなく、数メートル先へと少し角度を曲げた方向に放っていた。
そのため一階の天井に開けられた穴と、二階に開けられた穴は、位置がずれている。

三階へと続く穴の真下に到着した途端、上から何かが大きな木の実のように、魔物の頭上目掛けて降ってきた。

『やぁあああ！』

それはカツゴロウであった。
拾った魔物の尾の先端を、ナイフのようにして手に持っている。刃先を前にして、高々と頭上に掲げて落下する。そして下の炎の魔物へとぶつかる瞬間、思いっきり力を込めて、刃を真下に突き出した。

ズブッ！

カツゴロウは、霊体でありながらも感覚が存在する両腕から、餅を打つような鈍い感触を受け取った。
突き出した尾は、炎の魔物の右前足の付け根辺りに突き刺さった。尾先の刃は、実に固く鋭利で、炎の魔物に肉厚に深く喰い込み、黄緑色の血を流させる。

「ギャァァァァァァァ!?」

自身の火球の魔力の強さに紛れて、炎の魔物はこの時までカツゴロウの魔力の存在に気付いていなかった。
驚く炎の魔物が呻く間に、カツゴロウは素早く炎の魔物の前方に回りこむ。そして指を立てて挑発するような動きを見せると、前の廊下へと駆け抜けていった。

「ギィイイイイ！」

炎の魔物は怒りに震え、背を見せて逃げてゆくカツゴロウ目掛けて、業火を放った。
炎の嵐は散らばった瓦礫を吹き飛ばし、廊下の空間を占領し、逃げてゆくカツゴロウにグングン迫っていく。
炎はついにカツゴロウに追いついた。カツゴロウの全身を呑みこんで、更に奥の廊下へと飛んでいく。

「ピギャァァァァァ！」

炎の魔物は勝利の雄叫びを上げた。残留した炎が、眼前の廊下を、夕焼け時の太陽のように真っ赤に染めている。
だが炎が消え、立ち昇る煙が徐々に晴れてくると、奇妙なことに気がついた。
前方の空間は、まだ煙が完全に消えておらず、視界はかなり悪くなっている。だがその視界の中に、何かが動くものに気がついた。煙の濃度が下がっていき、それがはっきりと見通せるようになっていく。
その正体に炎の魔物は動揺した。そこにはさきほど炎に包まれたはずのカツゴロウが、何も変わらず平然と立っているからだ。

炎の魔物の足を刺してから、前に回りこむまでの間に、カツゴロウは非実体化を完了させていた。
今のカツゴロウは、霊感の無い人間にも姿だけなら、薄っすらと見ることが出来る。だが物に触れることなどの物理的な能力は一切無く、戦闘に置いて攻撃を行うことも当然できない。そして自身が何も出来ない代わりに、他人もまた今の彼に何一つ出来ない。火だろうと銃弾だろうと、カツゴロウの身体は全てを通り抜ける。

カツゴロウは指で目蓋を広げ、舌を出して馬鹿にしたような動作を炎の魔物に見せた。そして再び背を向けて逃げていく。

「ギジャアアアアアア！」

その挑発に乗ったのかどうかは判らないが、炎の魔物はカツゴロウを追って二階の廊下を走り抜ける。
さっきまで上がろうとしていた、天井の穴は放置されることとなった。

「あったぞ！」

三階を探索していたシバ・トサは、ようやく出口になりえる場所を発見した。

何故か焼け爛れた廊下の向こうに、何故か外の風景が見える。近づいてみると、それは外に接した曲がり角の壁が、何かとてつもない力で内側から破壊された跡だった。

大きな穴の向こうから、外の黒い城壁がはっきりと見える。穴の外へと顔を出し、下側を除くと、破壊された壁の欠片が散乱していた。

その中に焦げた動物の死骸らしきものも転がっていた。長い尻尾があり、その姿は蜥蜴のようにも見えたが、遠いので二人にはその正体がはっきりと判らない。

実はそれは、サラマンダーに吹き飛ばされた、あの異界の魔物二体の成れの果てであった。

（死んでるみたいだし、降りても大丈夫だよな。さてどうするか……）

思い切って飛び降りるか、壁を掴んでゆっくりよじ降りるか、二人は思案したが、途中で背後に迫る気配に気がついた。

「誰だ？」

あの魔物でないことだけは気がついていたので、二人はそれほど警戒することなく（それでも腰の剣には手をかけていたが）、振り向いて話しかける。

黒く焦げた廊下を歩き、こちらに近づいているのは、何やら犬のような生き物だった。

その犬のような狼のような生物は、全身が黒い毛並みで覆われていた。体格は人間よりはずっとあり、虎や獅子よりも一回り大きいくらい。明らかに通常の犬とは一線を外している。

そしてその巨大犬の頭は複数あった。中央を挟んで右横に一つ、左横に一つ、合計三つの頭がついているのだ。正面から見ると、三匹の犬が並んで立っているように見えるだろう。だが横から見ると、複数の首が一つの胴体に繋がっているのがよく判る。

そして尻尾は蛇になっていた。コカトリスのような蛇のような尻尾ではなく、完全に蛇なのだ。長い胴体にしっかり頭もついており、真後ろを睨んでいる。この蛇頭も含めた場合、この犬（？）は頭が四つもあることになる。

「あれって、さっき保管室で逃がした奴だよな？」

「ああ、〝ケルベロス〟だ」

ケルベロス。それは地獄の番犬と呼ばれる魔犬であり、世間的にはかなり凶暴な魔獣と認識されている。

だが今眼前にいるケルベロスからは、殺気のようなものが一切感じ取れない。それどころか、シバ達に対して怯えているようにも見える。

「何してんだ、お前？」

近づいていく度に、歩みがのろくなっていくケルベロスに、シバは怪訝な顔をした。そして自分からケルベロスに近づいていく。その途端ケルベロスは足を止めた。

シバは、ケルベロスの中央頭の、目と鼻の先まで近づく。お互い攻撃を仕掛ける様子は無く、ただ相手をジッと見詰めていた。

そんな中、唐突にシバがケルベロスに、右手人差し指を突き出し、叫ぶ。

「お座り！」

その声を聞くと、ケルベロスは反射的に、かつ慣れた動きでその場にしゃがみ込んだ。

カツゴロウは炎の魔物に追われながら、研究所の二階を鼠のように駆け回っていた。

鈍重と思われた炎の魔物は、本気を出すと予想以上に素早く、カツゴロウは何度か追いつかれていた。だが実体の無いカツゴロウは、噛まれようが踏まれようが、うんともすんともしない。

このままうまく時間稼ぎができるかと思われたが、途端炎の魔物が足を止めた。

『（あ！）』

カツゴロウも立ち止まり、背後から自分に顔を向けている炎の魔物に向き直った。

「シィイイイイイ！」

炎の魔物はそう、蛇のように低く唸ると、身体を曲げた。そして全身を翻し、さっきまで自分が通ってきた道とは逆方向に歩き出す。どうやらカツゴロウの追撃は無意味と判断したようだ。

『（もう駄目か……。皆逃げられたかな？）』

後ろを見せて遠ざかっていく炎の魔物を見て、カツゴロウは潮時を悟った。そして近くの壁に身を回し、その壁をすり抜けていった。

消えた先の壁を、炎の魔物が後ろからチラリと見やっていることに、カツゴロウは気がつかなかった。

「あった！　あそこだ！」

シバは前を指差し、すぐ後ろにしがみ付いているトサに向けて叫んだ。二人は今、ケルベロスに二人乗りで跨っていた。

二人はあの壁穴で出会ったケルベロスに乗り、三階上から地上まで軽々と飛び降りた。そのまま研究所の壁沿いを廻り、ようやく城壁の門を抜けたところだった。

城門の先には分厚い光の壁が立ち塞がっているが、その一点には四角形の穴が違和感たっぷりに開いていた。大きさはケルベロスに乗ったままでも充分通れるぐらいはある。

穴に近づくと、シバはケルベロスの右頭を引っ張った。ケルベロスは慌てて、その場に立ち止まる。

「カツゴロウは！」

「まだ来てない。一旦待……」

トサが言いかけた時、近くの岩場から突然何かが姿を現し、シバ達に飛び掛ってきた。

（なっ!?）

真っ先に反応したのは、シバでもトサでもなく、二人を背に乗せたケルベロスだった。機敏な動きで、地面を四本の足で同時に蹴り、見事な後方ジャンプをして見せる。

飛び込んできた者はさっきシバ達がいた地点に、シバ達はさっきと数メートル後方に前向きのまま着地した。両者はその場でお互いを見合わせた。

「こいつ、まだいたのかよ！」

現れたのは魔物であった。あの炎の魔物とは別の、通常体の個体である。まだ一匹生き残っていたようだ。あの長い尾を振り上げながら、こちらを睨みつけている。

即座に魔物は攻撃を繰り出す。こちらに一歩踏み出したと思うと、尻尾を右側から振ってきた。足払いをするつもりだったようで、尾は地面から僅か数センチのギリギリの高さを水平にして襲い掛かってくる。

「おお！」

ケルベロスは誰の指示を受けることも無く、その攻撃を回避して見せた。前向きに飛び上がり、足元を狙ったその尾を余裕でかわす。だがそれだけは終わらなかった。

「ブギャ!?」

事もあろうか空中へと跳ね上がったケルベロスは、前方の魔物の背中に着地した。背中に生えた四本の突起の付け根辺りを踏みつけて、そのままそこを踏み台にして再度飛び跳ねる。

甲冑を着た人間二人を背負っていながら、とんでもない身体能力である。これが数あるモンスターの中でも名を馳せる理由であろう。

ケルベロス達の体重と落下の重みに、魔物はバランスを崩し、その場で腹這いになって倒れ込む。ケルベロスはその前方の数メートル先に再着地した。

「ギャギャァァァァァァ！」

魔物は怒りに震え、後ろに向き直る。黄色く光る結界を背景して立っているシバ達に、今度は力任せに突撃した。

シバ達が跨るケルベロスは、それもまた軽やかに右に動いてかわす。かわされた直後に魔物もまた一瞬で方向転換をしようと足を回した。だが動きを見せたのは、ケルベロスだけではなかった。

「火突！」「水突！」

魔物が横を通り抜けた瞬間、ケルベロスに乗っていた二人が、同時に魔物目掛けて魔法を撃つ。

それは突進の勢いがまだ消えていない魔物に、二撃とも見事命中した。

「ピギィイイイイイ！」

魔法の威力に弾き飛ばされた魔物は、ゴロゴロと前へと転がっていく。そしてその先にある黄色い光の壁、この研究所全体を覆う結界に追突した。

「ギャァァァァァァァァァァ！」

結界に飛び込んだ瞬間、魔物の身体が急激に燃え上がった。結界に触れた背中から火が回り、魔物はもがきながら結界から離れる。

何とか魔物は立ち上がったが、背中は焼けて、四本の突起は崩れ落ちて短くなっていた。

「もう一発！」

シバはさらに攻撃魔法を放った。剣先から放たれた火炎放射が魔物を襲う。
結界から受けた痛手で弱っていたのか、魔物は避けることなく、真正面からその炎を浴びた。炎の勢いで魔物は数歩後退し、後ろの結界に再度接触した。

ジュアアアアアア！

前方と後方、両方から物が焼ける音が奏でられる。シバが魔法を解くと、そこには見事に消し炭になった魔物が、ボロボロと崩れ落ちる様が拝見できた。
シバは息を荒げて、魔物の亡骸を眺めた。

「また待ち伏せてたわね……」
「そうですね……」

見ると二人とも、顔から冷や汗が流れ出ていた。

「出るのはしばらく待とう」
「何でだ？」
「あいつら、この穴の事を知っていた。あたしらがここから出たら、あの化け物も外に出てくきてしまうわ！」

魔物達は何故か、能動的に人間を襲う習性があるようだ。
解放した実験生物達も十分危険がある者達だったが、二人はさほど問題には考えていなかった。彼らは元々、人里を避ける習性を持つ者が多い。
もし人里に近づいたとしても、ウェイランドの兵達なら十分排除できる筈である。
だがあの魔物に関しては、それは絶対不可能に思えた。

ここから出てしまった魔物が、山の中へと消えてくれれば助かるが、もし山から人里へと降りてしまったら……。
脱走が成功した後で、残された魔物達の事後処理がどうなるかなど、ここに到達するまで二人は全く気にしていなかった。いや一度は通信室で伝えようとは考えていたが、近づいてくる炎の魔物への恐怖からどうだってよくなっていた。
だが今この場で、明らかな魔物達の逃げ道を見て、シバは再度現状を考え直していた。

「だけどさ、あいつを何とかできる方法があるのか？」
「私に考えがある。すげえ危ないことだけど、付き合ってくれないか？」

トサはあっさりと頷いた。

「いいぞ。何かこのまま逃げるのも癪だったしな。ここで大勝負と行くとするか」

二人はケルベロスに指示を出し、背後の城門へと戻っていった。

最終話　帰還

『シバさん！　トサさん！』

城門を潜り抜け、研究所の入口前に出ると、ちょうどよいタイミングでカツゴロウが、入口の直ぐ側の壁から抜け出てきた。ケルベロスの姿に少し動揺しながらも、迷わず二人に駆け寄ってくる。

『あれ？　どうしてまだここに？　出られたんなら……』

「ああ、そのことでお前に頼みが……」

言葉途中でシバとトサは、ある気配を感じ取り、表情が凍った。いきなりの変化にカツゴロウはきょとんとする。

『どうしたん……』

カツゴロウの言葉はすぐに別の音で遮られた。

またもや唐突に、聞き慣れてきた爆発音が鳴り響いたからだ。今度は後方、今しがたカツゴロウが通り抜けた壁が、大爆発を起こした。

壊れた壁の破片が、散弾銃のように三人と一匹に襲い掛かる。

『うわあああっ！』

「馬鹿！」

驚きで立ち尽くすカツゴロウに、シバがケルベロスから飛び降りて、颯爽と駆け寄る。

だがこの時既にカツゴロウは非実体化を完了させていた。カツゴロウを抱き込んで破片から守ろうとしたシバの身体は、滑稽にすり抜けて、勢いよく地べたに張り付いた。

トサは水魔法の壁を張って防御した。シバは真上から、頭と背中に破片が三個命中、「ぐぼ！」という呻き声と共に、顔が土中に少し沈んだ。

「シバ！　カツゴロウ！　早く乗れ！」

「うおおい！」

シバは土だらけの顔を直ぐに持ち上げて、ケルベロスに乗り上げた。カツゴロウもそれに順じて乗り込む。

「ピギャアアアアアア！」

爆破された壁から、炎の魔物が現れた。姿を現すと同時に大口を開け、喉の奥から灼熱の光を放ち始める。

『ええっ⁉　何で⁉　さっき引き返したのに！』

カツゴロウの驚愕もそこそこに、三人と一匹に炎が飛んだ。これまで使っていた広範囲の業火ではなく、ホースの放水のように直線状に放たれる熱線であった。

三人を乗せたケルベロスは、瞬時に右に跳んで熱線を避ける。攻撃範囲が狭いため、今までより回避は簡単だ。ケルベロスをそのまま跳んだ右方向を走り、炎の魔物から逃げようとする。

炎の魔物の熱線は、一瞬では終わらなかった。熱線は継続して放射され続け、その状態のまま炎の魔物は、首をケルベロス達の方向へと曲げていった。

「だぁあああああああ⁉」

強烈な熱線が横向きに、大波のようにして襲い掛かる。手前の城壁

の壁が、溝を掘るようにして線状に焼きえぐれていく。
ケルベロスは垂直に跳び上がった。三人を乗せた獣の身体が地上数メートルにまで舞い上がる。
炎の波は、空中にいるケルベロスの足元を通り抜け、やがて消えていった。
着地して、炎の魔物を見やると、こちらに向けて二発目を放とうとしているのが見えた。

「水突！」

トサが炎の魔物目掛けて剣を突き放つ。発生した水の魔法の矢が、炎の魔物の口内へと真っ直ぐに飛んだ。

「グボアァ！」

水の矢は、今まさに炎を放とうとした第二の口に見事命中。思わぬ衝撃で口内の炎は掻き消え、炎の魔物は一瞬怯む。

「うりゃぁああ！」

ケルベロスの馬上から、シバとトサは次々と攻撃魔法を放った。いくつもの魔法の矢と斬撃が、炎の魔物に襲い掛かる。

「おお!?」

炎の魔物は、それらを素早く横に動いてかわしてみせる。大柄な身体には似つかわしくない、その華麗な動きに、シバ達は思わず驚嘆した。
三発目を放つかと思われた炎の魔物は、一瞬踏ん張るような動作をすると、猛牛のように一気に突進してきた。

シバ達は再び魔法攻撃を放ち続けた。だが炎の魔物は、突進しながらもジグザグに動いてそれらをかわす。いや、正確には何発かは当たっているのだが、炎の魔物の肉体は頑丈で、それくらいでは倒れたりはしてくれなかった。

「うわあ！　逃げろ！」

ケルベロスは走り出す。建物と城壁の合間にある地面を、後ろから追ってくる炎の魔物から逃げるため、懸命に疾走していった。

上空から見上げると正方形に見える研究所の壁の一角を曲がり、魔物の丸焼きが二つ転がっている場所を通り過ぎた辺りでトサが叫んだ。

「シバ！　お前の言ってた〝考え〟てのは一体何なんですか！」

「あの結界だよ！　カツゴロウにあいつを上手く誘い出して、あの結界にぶち当てちまおうと思ったんだけど……」

これじゃあ無理だ！と続けようとした所で、今度はカツゴロウが叫んだ。

『そうだ！　それで行きましょう！』

「「はい!?」」

『このまま一周して戻りましょう！　一旦城壁から出るんです！　いけますか!?』

「知らん！　それはこいつに聞いてくれ！」

現在必死になって走っているケルベロスに目を向ける。

大分息が上がっており、このとてつもなく巨大な研究所周辺をいつまで全力疾走できるか、かなり不安である。

ケルベロスと炎の魔物の走行速度はほぼ互角で、両者の差は開きも

しなければ閉じもしない。とにかく今はケルベロスの体力に望みを賭けるしかない。
たった今、研究所の壁の三角目を曲がった。
「うりゃりゃりゃあ！」
シバが、後方の曲がり角から姿を現した炎の魔物目掛けて、我武者羅に攻撃魔法を撃った。だが後ろ向きで姿勢が悪いため、中々標的に命中しない。
四つ目の曲がり角を通った。前方を見通せば、さっき自分達が通った城門が見える。
「もう少しだ！　行けえ！」
ケルベロスはもう死に物狂いといった感じで、意識があるのかどうかも定かではない。一方の炎の魔物は、顔が無いため表情は判らないが、歩行は全く乱れておらず、疲れを全く感じさせない。
そもそもあの生物に、疲労という感覚があるのかどうかも謎であるが……。
「「行けぇえええええ！」」
前に乗っていたトサが、ケルベロスの右の頭を手綱のように引っ張り、無理矢理方向転換させる。猛烈な速度で城門の通り抜け、目の先にある結界の穴に突進していった。
すぐに炎の魔物も城門を通り、後ろに姿を現す。
『行きます！』
「え⁉　おい⁉」
一番後ろに乗っていたカツゴロウが、突然飛び降りた。走行中に無

理矢理下馬したのだが、何とか地面への着地を成功させてみせる。
そして非実体化をしないまま、後ろから迫ってくる炎の目掛けて真正面から突っ込んでいった。

「何してんだ、お前！」

シバの叫び声にも振り向かず、カツゴロウは炎の魔物の顔面直前で飛び跳ねた。カツゴロウは、木から木へ飛び移る猿のように、炎の魔物の滑らかな顔面にしがみつく。
炎の魔物はカツゴロウに手を出そうとはしなかった。さきほどの追いかけっこで、カツゴロウへの攻撃は無意味と断定しているのか、カツゴロウを顔にくっつけたまま、真っ直ぐシバ達の乗るケルベロスを追う。
虫のように顔面にしがみ付いたカツゴロウは、その場で非実体化を始めた。

「へえ!?　カツゴロウ!?」

カツゴロウが透明化した途端、不思議な現象が起こった。カツゴロウの身体が、魔物の顔面に吸い込まれたのだ！
いや、もしかしたら自ら潜り込んだのかもしれない。カツゴロウの身体が、水中にゆっくり浸かっていくように、スッと魔物の顔面の中に消えていった。カツゴロウの霊体が、魔物の肉体の中に入ってしまったのだ。

ケルベロスは結界の穴を無事通り抜けた。対照的に炎の魔物は、カツゴロウが自身の身に入り込んだ直後、今までの爆走ぶりが嘘のように、あまりに突然にビタリと動きを止めてしまった。
結界を潜り抜けたケルベロスは、疲労でバランスを崩し、一気に前向きに倒れこんだ。その衝撃でシバとトサは、更に前方に投げ出される。

「カツゴロウ！」

地面に叩きつけられた痛みも何のその。二人はすぐに起き上がり、炎の魔物の方に振り向いた。

「グギャギャギャギャギャギャ！　ピゲェエエエエエエエ！　ピギィイイイイイイイ！　ゴゲェエエエエ！」

炎の魔物は……狂っていた。

盛大で長い奇声を上げ、駄々っ子のように手足をバタつかせたかと思うと、いきなりゴロゴロと転がり回る。尾をしきりに振り回し、蕎麦打ちのように地面に何度も叩きつけている。

その衝撃で、地面にいくつもの亀裂のような長い陥没が出来上がっていった。

「「……？」」

黄色半透明の壁の向こうから、この奇行を目撃した二人は、訳が判らず呆然と立っていた。

だがその奇行もまた、一瞬で止まった。いきなり鳴き止んで、姿勢を建て直し、今度は全速力で走り出した。シバ達に向かってではない。黄色い結界の壁に向かってである。

ズババババババババババババッ！

炎の魔物は、結界に勢いよく激突した。炎の魔物の上半身が、分厚い光の壁の中に潜り込み、内部で固体とエネルギーがぶつかり合う音が鳴り響く。

「……！　……！」

中で炎の魔物が何か叫んでいるようだが、空間が特殊なためか、肉声が一切聞こえない。結界の中に入り込んだ炎の魔物の肉体の表面が、見る見る焼け焦げていく。

こんな状態にありながら、炎の魔物は結界から抜けようとはしなかった。それどころか足を動かし、結界の中にドンドン入り込んでいく。

下半身が尾以外全て入りきった辺りで、炎の魔物の頭の先が結界の向こう側、シバ達がいる外の空間に抜け出てきた。

尾も入りきり、全身が結界を全て通り抜けたとき、炎の魔物は実に無残な姿になっていた。全身から夥しい煙が暗雲のように立ち込め、全身の皮が火を入れすぎた焼き芋のように真っ黒になっていた。

「ブゲェ……」

炎の魔物は口を開けた。また火炎か！と二人は身構えたが、そうではなかった。

口の奥から出てきたのは、ボンヤリとした光の球だった。その蛍火のような光球は、風船のようにフヨフヨと浮き、炎の魔物から離れていく。

炎の魔物は嘔吐でもしたかのような吐息を上げ、涎を垂れ流した。

「いけえ！」

トサが炎の魔物目掛けて魔法を放つ。刀身全体が青い光と竜巻のような水の渦に包まれ、それが一挙に開放される。大量の水が螺旋状に放水され、炎の魔物の身体に浴びせられた。

ジュアアアアアアアアアアアアアアアア！

耳によく響く蒸発音が、絶え間なく轟いた
水は、炎の魔物を包んでいた煙をかき消し、代わりに大量の白い水蒸気を放射した。
結界から受けた熱が元で、焼け石と化した肉体が、次々と浴びせかけられてくる水を、一滴も残さず気化させて周辺を濃霧に覆っていく。

「いくかな？」

二人は魔物の変調をジッと観察した。といっても霧のせいで、その姿は全く見えないが。
やがて霧の中から、炎の魔物が変わらないボロボロの姿で現れた。残念ながら生物保管室で戦った魔物のような現象は起こらなかった。結界から与えられた熱は、未だ冷め切らず。炎の魔物はおぼつかない歩行をしながら近づいてくる。

「ピギャアアアアアアア！」

炎の魔物の咆哮が、再び発せられた。

「やば！　逃げるぞ！」

シバとトサは駆け出した。ケルベロスも最後の力を振り絞って立ち上がり、二人についていく。
追いかけ合いが再び始めるが、弱り切った炎の魔物の足は先程よりもずっと遅く、シバ達にドンドン差をつけられていく。シバ達は小さな丘を登り、向こう側を下って姿を消した。

炎の魔物も当然その後を追う。結界の外は一面が積雪に覆われているのだが、炎の魔物が通った場所近辺は、身体の熱によって一瞬で雪が溶けて、温泉地帯のように膨大な蒸気を発散させていた。

丘を登り、頂上を見下ろしたとき、そこにいたのはあの二人と一匹だけは無かった。

「「グォオオオオオオオ！」」

彼らと共にいたのは、七頭のアイスワイバーンだった。ウルフ隊をここまで運んだ騎乗用の飛竜である。アイスワイバーンは皆一様に炎の魔物を睨みつけ、威嚇の声を上げる。

「行っけえ！」

側にいたシバが、剣を振って指示を出すと、アイスワイバーン達は口を大きく開き切った。口の奥から白い光が放たれ、それが風となって外へと噴射される。

アイスワイバーン達は、炎の魔物目掛けて一斉に氷の息吹《アイスブレス》を発射した。

晴れて青空が広がる山景色の中、一部分が吹雪へと天候が変わる。七連の凍てつく氷風が、同時に炎の魔物に降りかかった。

「ピギィイイイイイイイ！」

多量の冷風と雪を浴びせられ、炎の魔物は再び呻き声を上げる。高熱を宿した肉体が、瞬く間に雪を溶かし、再び白い気体を立ち昇らせる。

先程トサが放った水魔法とは比べ物にならない威力に、炎の魔物の身体は見る見る熱が下がっていった。やがて異変は起こった。

パァアアアン！

それは一瞬で終わってしまった。

炎の魔物の身体に亀裂が生じたかと思うと、突如破裂してしまっ

た。保管室の魔物と同じように、針を入れられた風船のようにして、爆裂・四散したのだ。

砕かれた炎の魔物の肉体が、花火のように飛び散り、ボタボタと地面に落ちていく。まだ少し熱が残っているのか、落ちた場所の雪が少しずつ溶けていく。

おぞましい力を見せた炎の魔物の、実にあっけない最後だった。

「「グォオオオオオオオオオオオオオオオッ！」」

アイスワイバーン達は翼を広げ、高々しく勝利の雄叫びを上げる。一方のシバ達は、歓喜を上げる元気すら無いのか、フラフラと腰を地面に下ろし、そのまま仰向けに地面に寝そべった。

「終わった……」

「ああ……」

それ以上の言葉は出さず、二人は空を見上げた。大分日は傾いて来ており、空はもうじき夕焼けに染まろうという時間に近づいていた。

ふと誰かが近くにやって来たことに気がついた。足音は一切立てなかったが、二人は気配でそれが誰だか気がつき、そちらに首を曲げる。

「よお。お前も無事だったか」

カツゴロウはシバ達が寝転がっている場所を足元に立ち頷いた。そして何かを喋ろうと口をパクパク動かしているが、声が全く出ていない。

「喋れないのか？」

カツゴロウは再び頷く。どうやら先程の技で力を消耗しすぎて、最初に会った時と同じ状態になってしまったようだ。シバとトサは腕を立てて、上半身を起こした。

バササッ！

「うおっ!?」

「何だ!?」

『……!?』

不意に聞こえた大きな羽音に、三人は一斉に空を見渡した。

山の下りの方向の上空に、二体の羽のある生物が飛行している。背中に白鳥のような翼が生えた白馬『ペガサス』と、全身が赤い羽毛で覆われた不死身の怪鳥『フェニックス』である。彼らは空を舞いながら、あっという間に山を降りていく。

不意に妙な気配を感じ、三人は研究所の方角、結界の穴のほうに振り向いた。

「「あっ!?」」

ウェイランド王国の南方に存在するエルダー王国。その北東地区に〝ヤマト〟と呼ばれる地方が存在していた。そこには地方名と同じ名の、ヤマト族と呼ばれる少数民族が住んでいる。

ヤマト族は古くからエルダー王国領に住まう一族であるが、他地域

とは一線を画した独特の文化・風習を持っている。何でも大昔に別の大陸から渡ってきた民族らしい。

そのヤマト地方のある場所、連なる山々の間に開かれた平野に、ヤマトの中心地となる町が存在していた。

平野を両断するように、大きな河が中央を流れ、その河を沿うように大きな農場が広がっている。その農場は、普通の畑とは少し違っていた。それは用水路と思われる堀と畝で区画され、それぞれが四角形の形に区切られている。

そしてその農場には、葦のように背の高い植物が、農場一面を埋め尽くすように無数に生えていた。それらの植物は黄色く枯れてきており、農場を黄金色に輝かせている。

この植物は稲《いね》と言い、ヤマト独特の穀物を収穫するための栽培植物である。

この農場は春に水を引いて大きな人口の池に変えて、そこに苗を植えつける。夏になると高く大きく育って、農場を青く染める。そして秋、つまり現在になると茎や葉が枯れ始めて、農場からは水が引き抜かれる。茎の天辺に穀物を実らせ、近いうちに大規模な刈り入れを行うだろう。

もちろん他に普通の畑も存在しており、所々に木造の瓦屋根の家が建っている。

平野の奥には街があった。周辺は石垣で固められて大量の水が湛えられた堀と、屋根つきの白い土塀で囲まれている。街の中央部には内堀に囲まれて、瓦屋敷を何重も積み重ねた感じの、塔のような形の城が建っている。

山々は紅葉で色づき始めており、そんな山の上空から平野に向けて、一羽の大きな鳥が飛んできた。

その鳥は馬ほどの大きさのある巨大なカルガモで、背中に一人の人

間を乗せて飛行している。この鳥は、エルダー王国の飛行用家畜のジャイアントダックである。

「ああ、ようやく見えてきたか」

まだ若いそのダックに騎乗している人間は、平野の街を見て弛んだ声を上げた。

その人間は十五、六歳くらいの小柄な少年だった。容貌は黒髪黒眼黄色肌で、板金鎧に似た形に仕上げられた赤い軍服を着ている。これはエルダーの上級軍人の制服で、この少年にはあまり似合わないものであった。

この少年はあの街の生まれで、先日まで王都ケルティックにいた。ある事情により、若い身で国の最上部の大きな仕事を背負うことになり、多忙な毎日を過ごしていた。そして現在、異界の魔物の調査に関連した仕事の都合と、この国の姫君の薦めにより、里帰りに向かう途中であった。

街に近づいていくと、少年はあるものに気がついた。

（あれは……？）

自分が飛んでいる方角とは全く別の方角。街から北の方角から、自分とは別の飛翔物体が二体、空を飛んで街に近づいているのだ。

最初は自分とは別のダックライダーだと思ったが、それにしては随分大きい。遠目から見ても、広がった翼の長さなどが、ダックとは全く異なるものであることが判る。

双方が街へと飛び近づいてくると、少年はその飛翔物体の正体をはっきりと見極めた。

「アイスワイバーン!?」

少年は思わず叫ぶ。その正体は、つい最近までこの国と戦争を行っていた、敵国ウェイランド王国の騎乗竜であった。
二頭のその白く巨大な背中に、複数人が跨っているのが少年には見えた。

「相棒！　急げ！」
「グェエエエエエエッ！」

少年はダックを急かし、全速力で街へと飛ぶ。だがこの時既に、アイスワイバーン達は街にかなり接近していた。元々飛行速度がダックより上の生物なため、街への先着は不可能だった。
ようやく少年とダックは、街を囲う塀の、入口の門の前に降り立った。集落の上では飛行してはならない決まりである。相手もそれをきっちり守っており、アイスワイバーン達は少年達と同じく、門の前に舞い降りていた。

（……はあ？）

危機を感じ取り、緊迫して街に到着した少年は、彼らの姿を見て唖然としてしまった。
アイスワイバーンに乗っていたのは、どうもウェイランド兵ではないようだった。……というか、一体何者なのかさっぱり判らなかった。

二頭のアイスワイバーンには、それぞれ二人の若い男女が先頭に乗っていた。どうやら彼らが竜騎手のようだ。だが彼らの後ろに乗っている同行者は、何とも珍妙な顔ぶれであった。
乗っていたのは彼らとケルベロスの他に、牛頭人身の獣人「ミノタウロス」。

頭と胴体が繋がっておらず、両手で自身の生首を抱えている女騎士「デュラハン」。

全身が赤い毛並みで覆われている人面の獅子「マンティコア」。

マンティコアの背中には、虫のような透明な羽が生えた、身長三十センチほどの三人の小人の少女達「フェアリー」がしがみ付いている。

彼らは研究所に捕まっていてシバ達が開放した中で、空を飛べなかった者達である。何も知らない者から見ると、まるで珍獣のサーカス団のような面子であった。

「……何なんだ？　お前ら？」

竜騎手達は、軍服姿の少年の姿を見ると、突然お辞儀を行った。

「突然の訪問失礼致しました。私は北のウェイランドから渡ってきた難民のシバ・シナノと申します」

「私はトサ・サカモトと申します。以後お見知りおきを」

シバとトサは、彼ららしくない礼儀正しい態度で自己紹介を行う。少年は顔をしかめて、どんな返答をすべくか、迷っていた。異様な顔ぶれが印象に残りすぎたせいか、その中に見知った顔があることに少し時間がかかった。

「カツゴロウ!?」

少年は、アイスワイバーンの最後列に乗っていた幽霊少年・カツゴロウの姿を見て、驚きの声を上げた。

カツゴロウはアイスワイバーンから降りて、少年の前に立つ。そして晴れやかな笑顔で声をかけた。

『クシュウさん、ただいま！♪』

異界魔の悪夢は、ようやく終結した。